エ-D-47

進星

古琉球

京都帝國大學
法科大學助教授　法學士　河上肇跋

沖繩縣立沖
繩圖書館長　文學士　伊波普猷著

沖繩公論社發行

OLD LOOCHOO

VIEWED
IN THE LIGHT
OF
LOOCHOOAN STUDIES

BY

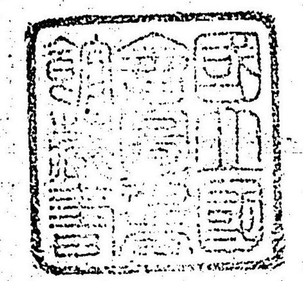
F. IFA

To which are added political Notes of two famous Loochooan Statesmen.

Loochoo,

1911.

291.99
~~219.99~~
I11bk
o



219604

正誤表

頁數	行數	誤	正
自序三	八	獨立（インデペンデント）	獨立（インデペンデント）
十八	七	ままを	あまみ
三一	二	しよわ	しよわれ
三二	四	琉	琉球
三三	三	の	琉球の
三三	八	琉の	琉球の
四一	一二	スマミ	アマミ
四二	七	琉古代	琉球古代
四七	十一	鍛岩	銀岩
四九	六	企武	金武
五〇	三	敎える	敎へる
五七	五	言語を	言語に
五九	二	呂朱	呂宋
七七	十一	化權	權化
八一	一	敎る	敎へ
八六	一	三司	三司官
八七	三	祢	一部
八八	一	李玄用	李完用
九〇	五	歷史	歷史の
九六	七	從はねば	從はねば
九八	五	琉王	琉球
一〇六	一	敎え	敎へ
一一〇	一〇	尙	猶
一一〇	十一	赤	亦
一一〇	十一	塲	傷
一一八	八	敎え	敎へ
一一八	十二	勝り	勝ち
一二九	一〇	吟	吟
一三五	八	衰え	衰へ
一三七	一〇	一	一部
一四一	七	と証	とを証
一五二	十二	阿廉	阿廉
一七〇	一	王ふ	王ふ
一七〇	二	王毋	王母
一七九	七	焚安知	焚安知
一八四	九	ましらで	ましらご
一八四	十二	せだかて	せだかこ
一九〇	三	酉長	酋長
一九一	五	あくか	あくかべ
一九六	十一	眞津湊	眞珠湊
一九八	八	捨い	拾ひ
二〇一	二	最敎	景敎
二〇九	三	歌球集	琉歌集
二一五	九	歷史	歷史
二一七	十一	敎え	敎へ
二二〇	二	平大下	平天下
二二八	四	想役	惣役
二三三	九	烏雀鷺	烏雀鷺
二三九	四	ある、	あるが、
二四六	五	徐光	徐葆光
二七〇	三	さやの	さやめ
二七〇	八	四階級	四階級
二八五	二	衰える	衰へる
二九五	十二	八竜山	八重山
二九八	六	美	美音
三〇六	五	あ	ウ
三〇八	一〇	すず	すざ
三〇九	五	あの	たの
三三七	一	祝ひ	ほこり
三四三	十二	方語（アル）	方言（アル）
三四五	二	an	aru
三四八	九	nkai	nkai（ンカイ）
三四八	十二	形容闘（ナカイ）	形容詞（ナカイ）
三五七	三	眞王（マウ）	眞王（マウ）
跋二	十一	月明の後	明月の夜

219.99
I116k
0

自序

『古琉球』を公にするに當つて、まづ言はなければならぬことは、恩師田島利三郎氏のことである。田島氏は私が中學時代の國語の先生で、琉球語に精通し、琉球人に對して多大の同情を有する人であつた。氏は言語學者チエムブレン氏が一種不可解の韻文として匕を投げた『おもろさうし』の研究に指を染め、その助けをかりて古琉球を研究せうと試みた。氏がオモロの研究に熱中してゐるのを見て、當時の人は氏を一種の奇人としてあしらつた位である。私が五年生の時であつた。田島先生は校長の氣に入らないで、諭示免職となつて、琉球新報社に入ることになつた。この時の校長は一種の愛國者で、琉球人（ジン）に高等敎育を受けさせるのは

國家の爲さならないといふ意見を有つてゐたが、さういふことが動機となつて、明治二十八年の秋に、沖繩の中學で、未曾有のストライキが起つた。私は漢那君（今は海軍少佐になつてゐる）外三名の同級生と共に、その犧牲になつて、二十九年の夏、東京に遊學することになつた。その時私は餘程悠々閑々した青年であつたが、それでも他日政治家になつて、侮辱された同胞の爲に奮鬪する決心をした。そして二三度高等學校の競爭試驗に應じて、可なり苦い經驗を嘗めた。其間に、私は自分の性質や境遇が、政治的生活を送るに適せないといふことを覺つて、斷然年來の志望を拋つた。三十三年に、京都の高等學校に入學した頃には、言語學を修めて、琉球の古語を研究してみようといふ氣になつてゐた。二三の友人は私が目的を變更したのを惜んで、幾度となく忠告をして呉れた。三十六年には、愈々文科大學で、言語學の講義を聽くやうになつた。

二

その頃、田島氏も上京して、日本女學校に教鞭を執つて居られたが、私が言語學を修めると聞いて、大さう喜ばれた。そして私の家にしばらく厄介になつてゐた返禮として、數年間苦心して集めた「琉球語學材料」を悉く私に讓り、他日其研究を大成して呉れといふことになつた。私は氏と一緒に本郷西片町で自炊するやうになつたのを幸、琉球研究の手始めとして少しづゝオモロの講釋を聽いた。二三枚位も進んだかと思ふ頃、氏は突然東都を去つて、台灣へ行かれたので、私は大に失望した。うこで已むを得ず、オモロの獨立研究を企てたが、宛然外國の文學を研究するやうで、一時は研究を中止せうと思つた位であつた。しかしオモロが如何に解し難い韻文だと言つても、もと〳〵自分等の祖先が遺した文學であつて見れば、研究法さへ良ければ、解せないとも無いと思つて、根氣よく研究を續けた。其頃考古學の講義で聽いたフランスの學者がロ

セッダストーンを研究した話などは、私の好奇心を高めるに與つて力があつた。それから琉球古語の唯一の辭書『混効驗集』の助けによつて、オモロを讀み始めた。一年も經たない中に、半分位は解せるやうになつた、それでいけない所は田舍や離島の方言の助けによつて讀んだ。二年も經たない中に、七八分通り解せるやうになつた。三十九年には、大學を卒業して國に歸つた。私の專門の知識は如何がはしいものであつたが、私は兎に角オモロのオーソリチーとなつて歸つた。

この通りオモロがわかりかけると、今までわからなかつた古琉球の有樣がほのみえるやうな心地がした。私は歷史家でも無いのに、オモロの光で琉球の古代を照して見た。時々は妙な發見などもした。發見する每に、これを鄕里の新聞に出した。それを見て伊波君は氣が狂つたのではないかと怪しんだ人々もあつたといふことだ。

さて過去數年間新聞に出した草稿が今では積つて二十餘篇になつた。もとより公にする程の價値も無いのであるが、友人大城彥五郎氏の勸めによつて、今度之を「古琉球」と題して公にすることにした。學友照屋君の話によれば、田島氏は私が能く新聞に出したのを見て伊波君も大分當世流の學者になつたと歎せられたとのことであるから、この書を公にすると聞いて、田島氏は恐らく眉を顰めるであらう。田島氏の希望にそむくことは知りつゝもなほかういふ小冊子を公にするに至つたのは、別に考へる所があるからだ。萬一この書が沖繩の社會に對して貢獻する所があつたら、望外の幸である。

この頃台灣から歸つて來た人に聞くと、田島先生は坊主に扮して、南支那を放浪して居られるとのことであるが、私は私がもつと價値のある著書を公にするの日、田島先生が瓢然としてこの南海の樂園に再來されん

とを祈るのである。

表紙の古琉球の三字は首里城の門前に立つてゐる尙眞王の頌德碑から苦心して刷出したのである。尊圓親王の流れを汲んで、世に尊圓城間（グスク）と呼ばれたぐすくまの大やくもいの筆であることを附記して置く。

明治四十四年七月初旬

沖縄圖書館にて

伊波普猷

古琉球目次

○琉球人の祖先に就いて　一
○琉球史の趨勢　六
○沖縄人の最大缺點　一〇七
進化論より觀たる沖縄の廢藩置縣　一一一
土塊石片錄　一二〇
浦添考　一二八
島尻といへる名稱　一四四
阿麻和利考　一五一
琉球に於ける倭寇の史料　一八一
琉球文にて記せる最後の金石文　二〇二
○官生騷動に就いて　二一四
○俚諺によりて說明されたる沖縄の社會　二三九
沖縄に固有の文字ありしや　二四四
○琉球の國劇　二五一
琉球音樂者の鼻祖アカインロ　二五六
オモロ七種　二六六
琉歌と頭韻法　二九二
病床日記の一節　二九七
○可憐なる八重山乙女　二九九
○歌謠に現はれたる八重山の開拓　三一七
八重山島の歌謠　三三五
八重山童謠集の序　三三九

琉球語の掛結に就いて　三四一
P音考　三五八
琉球の神話　三七四
附錄
羽地按司仕置　三九三
具志頭親方獨物語　四四三
跋

古琉球

文學士　伊波普猷著

琉球人の祖先に就いて

徳川時代の學者に藤井貞幹といふ人があつて、『衝口發』を著して皇室の系統や古代の言語風俗などを比較研究し、日本と支那と朝鮮との關係を說いて、素盞嗚尊（スサノヲノミコト）を辰韓の主である日本の皇室は吳の太伯の後である神武天皇は琉球の惠平也（イヒヤ）島に御生れになつたといふ樣な說を出した所が本居翁は之を見て大に憤慨し、『鈍狂人』を著して反駁を試みられた。貞幹の議論と隨分亂暴で取るに足らないのであるが、日本が古く支那朝鮮

と密接な關係を有してゐたとや神武天皇の紀元が六百年も減るといふ議論などは、今日の學者の說と一致してゐる。貞幹の說をして眞ならしめば、琉球の伊平屋島は日本民族の故郷となるのである。今日の學者の中でも之に似た說を唱へてゐる人がある。先年東京日日新聞で久米邦武先生の『日本民族の故郷』といふ題で日本民族はもと南支那にゐたが琉球を經過して日本島に來たのであるとの說を發表された。琉球にもかつて自分等の祖先は山東省の邊から來たと唱へた學者があつた。この學者は首里崎山の長濱といふ人である。併し以上の諸說は所謂空中の樓閣で何れも其基礎が無い、即ちその兩端を繫いでゐる琉球群島の研究に手が屆いてゐない。人もし言語學神話學人種學考古學等の助けをかりて琉球群島即ち鹿兒島灣の出口から臺灣島附近に至る大小五十餘の嶋嶼の研究に從事したら、思半ばに過ぐるものがあらう。この嶋嶼の住民は殆んど同一な

る言語風俗習慣容貌氣質を有してゐる。古史神話の語る所によれば、琉球人の祖先も亦天から降つたといふ事であるが、その所謂天なる所は果してどの邊をさすのであらう。

之に就いて二百三十二年前に死んだ琉球の經世家羽地王子向象賢氏は其『仕置』の中に、

竊惟者此國人生初は日本より爲渡儀疑無御座候然者末世之今に天地山川五形五倫鳥獸草木の名に至迄皆通達せり雖然言葉之餘相違者遠國之上久數通融爲絶故也五穀も人同時日本より爲渡物なれば云々

と書いてゐる。氏は言語の上から琉球人の祖先も日本から渡つたといふ說を唱へた最初の人である。氏の說と明治の初年に至つて琉球最後の政治家宜灣朝保氏によつて布衍された宜灣氏は位三司官（大臣）に上つた人で、松風齋と號し和漢の學に通じてゐた、ことに和歌は薩摩の歌人八田

知紀の門下でも鏘々の名があつたといふことである。氏は向象賢の説に賛成して、古事記傳萬葉集などを見るに日本上古のことば爰には今も多く殘れりといつて、三十餘の琉球語を取り出して記紀萬葉中の古語と比較してゐる。この語彙といろはのみだしをたいて皆餘白をおいてあるから稿本の中でも着手始めのものであることがわかる。氏は王政維新の慶賀副使として明治五年上京したが、琉球國王の藩王にされたのを受けたといつて反對黨の忌む所となり、辭職後明治九年憂を抱いて死んだ。左にその琉球語彙の拔萃を紹介せう

いめ。夢なり、古事記傳十八五十丁古へは凡て伊米と云て由米とは云はざりき師説に伊米は寢目なりと云はれき米は所見の約りたるにて眠たる間に見ゆる由なりと云へり註に目も所見なり。

いくところ。幾人と云ことをうやまひていふことばなり古事記傳卷三十六丁の小註に稱德記の宣命に二所の天皇とあり中昔の言物語かごにも貴人をば皆幾所と云り今世の俗言に御一方御二方と云が如し。

いが。我におなじ古事記傳卷十八三葉。伊賀所作仕奉於大殿云々註に伊賀は他に例もなく甚心得がたき言なるを試ふ強ていはゞ伊賀の國の風土記伊賀の處に猿田彦神女吾娥津媛命云々此神之依知守國帶吾娥之郡云々後改伊賀吾娥之音轉也とあり伊賀は阿賀と通へり阿賀は自己の事なるを又人を賤しめて云にも用ひるにや皇極紀十一に蘇我大臣蝦夷云々嗔罵曰噫入鹿云々儞之身命不亦殆乎

はふ。陰戸の事なり同書五五十丁美蕃登は御陰也訓陰上云富登名義は師云舍處なり萬葉に保々萬留とも布保隱とも云へる同じ類も物を含む故の名なりとあり小腹は富登上の意かといへり琉語ホガンと云。

ぬゥじ。虹の事なり古事記傳卷三十四丁此沼邊一賤女晝寢於是日耀

如虹指其陰上云々註に名抄に虹和名爾之とあり今の世にも然云へども天武紀に殿内有大虹とミえ萬葉卷十四十三にも伊香保呂能夜左可能爲提爾多都奴自能とあれば奴士と訓べし是吉言なるべし萬葉なるは東語かとも云べけれど書紀の訓にも然あれバなり云々

わ。　吾也我ものをわものと云也萬葉卷一に吾をまつ津バきふりするなゆめ註に吾をわとのみいふは古語也と云り。

よこし　讒言うう也古事記傳卷四十二十讒とよめり。

たアに。　誰になり古事記傳卷四十三十七丁多爾加母餘良牟誰レにかも將依なり誰を多とのみ云は聞かれぬ如くなれども誰之と云も同しこは吾を和己を渙能其を曾此を許と云と同じ格ありと云り

たね。　男根也古事記傳卷七五十九丁物質は毛能邪泥と訓べ去書紀には物根とあり佐泥と多泥とは其物も名も通へり後の世にも人の母を云ふ

は某の腹父を云には某の種と云木草の種子も同じ云々。

うはおり、　くわなり。　嫉妬也、　後妻前妻

やぐさみ。　寡婦の事也古事記傳卷十八四十四丁我之御子等不平坐良志云々註に不平は夜久作美と訓べし此言の意は未だよくも得ざれども古言なるべし書紀神代上卷に須佐之男命荒び坐る處に日の神畏怖不平と見え天武卷に朕身不和と見也。

ちけづ。　蜻蛉也古事記卷四十一四十七丁蜻蛉は書紀神武卷にも見えたり和名抄には蜻蛉和名加介呂布とありて阿伎豆と云ふ名は舉ず註に古へは阿伎豆と云しをやゝ後より加牙呂布とは云なるべし但し萬葉に加藝呂肥と云蜻蛉玉蜻など借りて書ればうのかみより加牙呂布とも云ゝにこり加牙呂布は加藝呂肥の訛れるなり或人云今も陸奥の仙臺南部などにてい阿氣豆と云と云り今の世にトンバツと云蟲なり云々

ゐかとんき。　田舍などにて曉をしか云也萬葉卷二にわがせこをやまとへやるとさよふけてあかとき露にわれたちぬれし註に曉はアカトキと云が本語也と云り。

しちやたん。　細螺のと也和訓したゞみなり萬葉卷十六二十九丁に机島能小螺乎伊拾持來而石以都追伎破夫利云々

ひゝらぐ。　契沖　口響なり荒を食へば辛味の氣の後までのこりて口の中の疼くをいふ是聲の響の如くなればなりと云り。

以上は日本々土では既ま死語となつたもので今尚琉球群島で使はれてゐるもの丶重なる例である。宜潤氏が死んでから十八年（明治二十七年）言語學者チエムブレン氏沖繩島に遊び種々の方面から琉球を研究し、翌年の英國の地學雜誌の四號五號六號に The Lachu Islands and their Inhabitants,『琉球諸島及び其住民』といふ六十五頁の論文を掲げて其中に。

琉球人はうの體質日本人によく似てモンゴリヤンのタイプを有ちてゐる。彼等の祖先はかつて共同の根元地に住してゐたが、紀元前三世紀の頃大移動を企て對島を經過して九州に上陸し、その大部隊は道を東北にとりゆく〳〵先住人民を征服して大和地方に定住するに至つた。うの間に南方に遁ひつゝあつた小部分の者は恐らく或大事件の爲に逃れて海に浮び、遂に琉球諸島に定住するに至つたのであらう。うれは地理上の位置でも傳說の類似でも言語の比較でも容易く說明される。

といひ、又うの琉球語に關する著書 Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language, に於ては、日本人と琉球人とが最著〻い系圖的關係を有もることを言語學上から推論してこの二國語の文法を綿密に比較すると、語詞論に於ても措辭論に於て

も根本的一致の存在することがわかる。しかもその一致たるやスペイン語とイタリー語の間に於ける一致の如きものである。單語の場合に於ても亦同樣のことが言へる。もしこの兩國語の祖語なるものかあつたとしたら、日本語は其祖語の或部分を忠實に保存し、琉球語も其祖語の他の部分を忠實に保存してゐる、しかも近代の日本語が上世の日本語を代表するよりも、琉球語がそれを代表することが一入忠實である。それと動詞の語尾變化に於て著しく現はれてゐる。要するに二國語の相互的關係をスペイン語とイタリー語の相互的關係否むしろスペイン語とフランス語の相互的關係に比較しても大過はなからう。

といつて、之を次のやうにあらはしてゐる、

（祖語）｛（古代日本語――近代日本語
　　（古代琉球語）――近代琉球語

チエムブレン氏の說は向象賢氏の說と暗合してゐる。實に以上三氏がいへる如く、琉球群島には記紀萬葉にゐる樣な日本上古の言葉が夥しく遺つてゐる。思ふに島或は山中の如き不便のところには、言語も亦その他のものと共に、其原形に近い形式を以て殘留せるは、爭ふべからざる事實である。この點に於て琉球群島は天然が時間を場所に現はして吾人に與へたる恩惠の一例である。左に自分が琉球の古語及び方言に就いて調査した結果の一端を錄して、チエムブレン氏の說を確めて試よう。先づ煩を厭はず宜潤氏の語葉に出てゐない單語を少ーばかり紹介せう、

まゝき。　オモロニ「ゐけ、ゐがる明星や、ゐけ、神ぎやかなまゝき」といふことがある。大槻氏の言、海を案ずるに、まゝきは細射、一種の弓又は矢にいふ語、詳ならず、和名抄「細射弓箭、末末岐由美」「いかにせむまゝきの弓のともすれば引き放ちつゝ命はぬ心を」「まゝ

きの矢立」などいふことがある。三日月を神の金眞弓に譬へ、明星を神の金の矢に譬へたオモロを見ると古代琉球語では矢又は弓をまいきといつてゐたことがわかる。

つび。　尻又は肛門のこと、和名抄に房奴經に云玉門女陰揚氏漢語抄名也云屎道鼻今案俗人或云朱門並未詳伊豫の方言でも尻のことをツベといふ。

ない。　地震のこと、琉球群島何處にいつてもデシンといはずしてチイといふ。

し、。　肉のこと

いりき。　かしらのゐかのこと。和名抄に加之良乃安加俗云伊呂古。

なへぐ　　寒

ふく。　肺のこと。和名布久不久之

ほそ。　膍胵のこと。和名保曾俗云倍曾。

まる。　燕のまりたける古くり（竹取物語）屎麻理散（古事記）筑前土佐にてもしかいふ。

まじもの。　蠱物（六月大祓）

よむ。　算へること。「わが戀はよむともつきじ荒磯海のはまのまさご

はよみつくすとも」

なも。　産むこと。おのがなさぬ子なれば（竹取）

あかる。　別るゝこと。人々あかるゝけはひなどすめり（源氏空蟬）

いきぶい。　おくび（噎）のこと。

かなし。　可愛きこと。われかなしと思ふむすめを（源氏夕顔）

ゐもり。　天降のこと。沖繩にても大島よてもしかいふ。

ひかされて。　ゐやーう短かりける御契にひかされて（同上）

ふぐり。　陰嚢のこと。

まだ澤山あるがこれ位に去て置く。以上の言葉を記紀萬葉源語の如き日本古代の文學を讀んだ筈の無い小さい島々の愚民が日常使つてゐると聞いたら、誰れしも驚かずには居れまい。思ふにこれらの言葉はたしかに琉球人の祖先が大和民族と手を別ちて南方に移住した頃に有つてゐた言葉の遺物である。今日の琉球語にハ謙倉以前の言葉や薩摩の方言が多く混じてゐる。琉球語の單語は十中八九までは日本語と同語根のものであるといつても宜敍い。たゞ音韻の變化や語尾の變化によつて一寸きいては外國語のやうであるが、能くきいてみると日本語の姉妹語であることがわかる。

次にその音韻に就いて調べて見ても面白い事實が發見される。くはしい音韻組織のことは他日に讓り、茲にはp音に就て述べて試よう。日本語に於てはハヒフヘホの古音はパピプペポ（p）なる破裂的両唇音であつた

のが七世紀（推古天皇）以前からファフィフフェフォ（F）なる摩擦的両唇音に變じ、十五六世紀（足利の末）の頃からハヒヘホ（H）なる喉音に變り始めたことは今日學者間の定論になつてゐる。今日でもフのみいやいり摩擦的両唇音である）。この音韻變化の運動の中心と勿論近畿地方であつて、漸次地方に傳播したのであるから、中心點をさる遠い地方即ち奥羽九州出雲には今なほ古音が多く保存されてゐる。然らば琉球群島の方言はこの問題に對しては如何なる位置に立つのであらうか。日本語に於ては今日文字では吸フと書いて實際はスーと發音してゐるが、このスフは古くは文字通りスフ（sufu）と發音してゐたに相違ない。琉球語で吸フといふことをスプル（supuru）といつてゐるのを見ると、七世紀以前の日本語では吸フはスプ（supu）と發音してゐたに相違ない。其他シホカラシ（鹹）をシプカラサ（shipukarasa）といふのも好い例である

日本文化の影響を除り受けなかつた宮古八重山國頭では、今もなほパピプペポ（p）の音が盛ま使はれてゐる。例へば日本の大といふことは琉球の標準語でもウフ（ufu）國頭宮古八重山の方言ではウプ（upu）である。左に音韻の表を作つて首里國頭八重山宮古大島の五方言を比較したら、音韻變化の階段が一目瞭然である。

	首里	國頭	八重山島	宮古島	奄美大島
葉	fa	pa	pa>ha	pa	fa
春	faru>haru	paru	faru	faru	haru
歯	ha	pa	pa	pa	fa ha
柱	hayа	paya	para	para	harya
臍	fusu	pusu	pusu	pusu	fusu
畑	hataki	pataki	fataki	pataki	hatehe

この表によつて琉球の標準語及び奄美大島の方言ではF（ファ行）からH（ハ行）に移りつゝあることがわかり、國頭宮古八重山ではP（パ行）からF（ファ行）に移りつゝあることがわかる。實に琉球に於ては推古朝以前の音韻變化と足利時代の音韻變化が一度に見られるやうになつてゐる。（「P音考」參照）

次には動詞の語尾變化に就いて一言もる必要がある。日本語の原形動詞は今日の四段活用に近いものであつたとの說が有力であるが、琉球語の動詞ハ凡て四段活用のやうに活いてゐる。琉球語の動詞の活用が、記紀萬葉の中に僅ばかり殘つてゐて七世紀以前の形をほのめかしてゐる動詞の活用に酷似をてゐるのは注意すべきことである。

又りの係結のことを比較するのは一入趣味がある。琉球語の係結と日本語の係結と餘程好く似てゐる、ヤ（ya）ガ（ga）ヌ（nu）の如き主格をあらはす豆爾波を受けて終止法で結ぶ普通の結法もあり、ド（du）といふ豆爾波

を受けて連體法で結ぶ結法もある。このドは日本語のぞに相當する豆爾波で、日本語で文語にのミあつて口語にはないが、琉球諸島では今尚ほ規則正しく使はれてゐる。又オモロといふ古い文學の光によつて日本語のこゝに相當する豆爾波があるといふことが明かになつた、これはショ、ジュ、スといふ豆爾波で、その用法も亦こゝのそれと同一である。左にゝの二三の例をあげてみよう。

（コノ大島ニ下リタレバ、ともすへ（千年モ）たぎやかもいす（尚眞王コソ）ちよわれ（ナガラヘカシ）（1）

あぢおゐいしよ（ワガ君ヲコソ）とよめ（ウタハメ）（2）

てにてる（天ニ照ル）ほし（星ヲ）じよ（コソ）ほし（星ヲ）じよ（コソ）

さにしよわれ（算ヘヨ）（3）

きこゑきみかなし（タフトキ君ヨ）しま（島ヲ）おりて（シロシ）ちよわれ（召せ）

ゑそこ（船ノ）かよわ（通ハム）ぎやめ（カギリ）あぢおゐい（ワガ王）しよ（コソ）世しりよわれ（シロシメセ）（3）

このす又はしよといふ豆爾波はオモロの中にのみあつて、四百年前の金石文には見出すことが出來ないから、當時い文學の上にのみ遺つてゐて、口語の上では影を隱してゐたものと思はれる。しかし今日の琉球語よ於てもダンジュカ（古くはダニジョ）といふ副詞句となつて遺つてゐる。これで日本語と琉球語とは詳細の點まで一致してゐることがわかると思ふ。（「琉球語の掛結に就いて」參照）

この次は數詞のことを述べよう。日本の數詞には固有のゝと支那のと二通りあつて前者は殆んど後者に壓倒されたが、琉球に於て。亦同樣の現象がある。しかし久しく文明の光に浴しなかつた宮古八重山には今尚

固有のゝが遺つてゐて、日本固有の數詞よ髣髴たるものがある。日本で古くはトヲカアマリヒトヒ（十一日）ハツカアマリフツカノヒ（廿二日）ハツカミカノヒ（廿三日）といつた樣に、宮古八重山では今尙トヲカミカ（十三日）トヲカヨカ（十四日）といふ樣に稱へてゐる。八重山では一から二十までは固有のどなへ方をしてトヲヒトツ（十一）トヲフタツ（十二）……といふ樣にいつてゐる。宮古島に至つては一入古代の面影を留めてゐるのがある。ハタツ（廿）ミスツ（三十）ユスツ（四十）イスツ（五十）ムスツ（六十）ナナスツ（七十）ヤスツ（八十）ククスツ（九十）ム、ツ（百）といふとおへ方がある。又一人をタヴキャー五人をイツヌビト二十一人をバタヌビトタヴキャー百人をム、ヌビトとおへるのは餘程面白いことてある。百九十八年前に出來た琉球古語の辭書「混効驗集」（西暦千七百十一年舊琉球王國政府編纂）を案するにテツ一、タツ二、ミツ三、ヨヴツ四、イツ、五、

ムツ六、ナ、ツ七、ヤツ八、コ、ノツ九、トウ十、ハタチ二十、ミソヂ三十、ヨソヂ四十、イツソヂ五十、ムソヂ六十、ナ、ソヂ七十、ヤソヂ八十、コ、ノソヂ九十、モ、ソヂ百、といふことがある。オモロにはヤモモ（八百）トモ、（千）などの使ひ方がある。トモ、はモ、（百）のトヲ（十）といふことであつて、古代日本語のチ（千）に相當もべき言葉である。思ふに琉球人の祖先が大和民族と分離せし當時いらの言語には千といふ思想をあらはす言葉はまだ無かつたのであらう。

これまで述べた證明で日本語と琉球語とは姉妹語であることが略ぼわかつたが、もし言語が人種の所屬をきめる完全な尺度であつたならば、琉球人は直ちに日本人と同人種になるのである。しかー世には三百年も立たない内に自國語を忘れて支那語を話す滿州人の如きものもあるから、言語はどかくあてにならないといふことがわかる。チェムブレン氏の言

語學的研究も鳥居龍藏氏等の人種學的研究と相俟つて確實なるものとなるわけである。たとひ言語學的證明ばかりであつたとしても、上古に於て二者の關係は至つて密接であつたといふことは承認しなければならぬ。

さてこゝに二者の体質の類似に就いてはくは去く述べることが出來ないから、其中で餘程面白さうな例を一つあげてをようと思ふ。日本人の生るゝや多くは其臀部に青色の班點があるが、これは歳月の經つに從つて消失せるものである。これは他の人種には絶えて見ることが出來ない特質であるが、琉球の赤子も生れる時には皆この面白い特質をもつてゐて二三歳の頃に消失するといふことがある。この面白い例丈でも二者が同一の人種であるとの証明が出來ると思ふ。

それから土俗（エスノグラフィー）の方を一つ二つ調べる必要がある。琉球人が日本上古の特徴ともいふべき曲玉を使つてゐることは注意すべきことである。琉球では曲玉のことを玉珈玻羅（タマガハラ）又は珈玻羅玉（ガハラタマ）といつて古くは一般にはいたのであるが、今日でい宗教的儀式の時に祝（ほ）といふ女の神官がはくのみてある。八重山島ではつひ二百年前迄女が之をはいてゐたことは西暦千六百九十三年（清の康熙三十二年）の曲玉買入禁止に關する古文書を見てもわかる。

口上之覺

當島住古より女上下至迄、はら玉は中位屋敷並に大和人唐古人右かはら玉過分持渡貳拾五づつ貳三石にて買取申候に付石物費罷成其上不考（カンガヘ）にて掛に請取代受拂之時分差迫迷惑仕方も有之候右之通にてば永々柏保申間敷與奉在候節御法度被仰付可被下候以上

頭（カシラ）貳人
首里（シユリノ）大屋子（ウホヤコ）三人
與人（ユンチユ）拾人
目差（メザシ）拾四人

五月二十五日

右被申出候通相違無御座候間御法度被仰付可然と奉存候尤當所にて申渡候得、往、古、より、用、來、儀に候得は難及候間奉得御差圖候此上は宜數御被露願上候以上

月　日　　宇江城親雲上

富盛親雲上様
池城親雲上様

此表書之通遂被露願之節御法度被仰出候間向後相傳候樣可被申渡置候以上。

八月十八日　　伊佐親雲上
　　富盛親方

八重山島在番
宇江城親雲上

この古文書を見ると、八重山の方では往古、から、女が、曲、玉、をはき來つたのを、日本の商人などが見て、一入立派な曲玉を製造していつて賣りつけたといふことがわかる。馬來人の故郷に近い與那國島でも四五十年前まで曲玉をはいてゐたとの事である。日本內地では千數百年前に跡を絕つた風俗が今尙琉球群島よ遺つてゐるとは頗る不思議な事である。先島では曲玉のことをマガーラダマといつてゐるが、これは珈玻羅玉と同語で矢張曲玉の意である。又女の神官の曲玉のはき具合が內地の古墳から掘り出も土偶のうれに似た所のあるのは面白いと思ふ。

其他ちよつとした習慣の中にも馬鹿に出來ないのがある。沖繩で自分の家に姙婦があゐ時には屋根を葺かないといふ習慣があるが、內地の或地方でも之に似た風習があるとの事である。古事記を繙いて見ると、豐玉姬が鵜葺草不合命を生み給ふ時、海邊に鵜の羽を葺草にして產殿を造つたが、其產殿未だ葺きあえぬに御腹たえがたくなつて御子を產み給ふ

た、、、、うこで産み給ふた御子を天津日高日子波限建鵜葺草不合命と名つけたといふことがある。又沖縄では子が産れると、其日に川下りといふ儀式があつて先づ赤子に初浴をさせた後で着物をかぶせ、その上から小さい蟹を數匹這はせるやうな事をする。古語拾遺を讀んで見ると、彦瀲尊誕育之日、海濱立室、于時掃部連遠祖天忍人命、供奉陪侍、作帚掃蟹、仍掌鋪設、遂以爲職、號曰蟹守。今俗謂之掃守者彼詞之轉也といふことがある。これらの琉球の風習と日本の傳説との間には何等かの關係があるに相違ない。

それから俚歌童謠の比較も趣味あることである。日本ではどの地方でも雷があると、桑原〳〵といふが、沖縄でも矢張桑木のまた或は桑木の下だや、へるといふ。これは日本本土ではとうに意味を失つてゐるが、沖縄でもまだ其意味が遺つてゐる。傳説によれゞ往昔雷公がひどくゐばれたて

揚げ句桑の木の上に落つこちたが、桑は餘程堅い所がゐるので、雷公とうの股に狹まつて死んだとのこと。爾來雷公は桑の木をこわがるといふので雷鳴の時にはいつでも桑木のまた或は桑木の下だやべると唱へて居ればは安全だといふ事になつたのである。奄美大島でも矢帳桑下さうもといふさうである。八重山では雷鳴の時には桑の葉をかざすとか聞いたが、奥羽地方のどこかでもさういふやうなことをすると聞いた覺えがある。かういふやうに中央部では意味を失つた傳説で邊鄙な所で意味を有つてゐるのがある。今一つ其面白い例をゐげると、内地で子供が能くうたふ御月樣いくつ十三七つ（まだ歳若いな）といふ歌でゐる。この歌はどんな古老に聞いても其意味のわかる氣遣ひはないが、古くは何か意味があつたのでゐらう。ところが長い歳月の間にその原形がくづれて今日の樣な形になつたに相違ない。八重山島のチョウガ節はりの原形をほのめかさて

ゐるのであらう。

月の美しや十三日、乙女美しや十七歳。

なんと面白い歌ではないか。琉球群島はさながら天然の古物博物館である。こゝにはキリヤム・モリスの詩情を動かしさうな神話傳説がいくらでもある。古事記の開闢説に似た琉球創世の説話もある。アダムイブの罪惡神話に似た戀島の物語もある。浦島の説に似た與那原の濱物語もある。羽衣傳説に似た銘苅子の傳説もある、これは羽衣説話が謠曲文學に於て詩化されたやうに、琉球の戯曲作者玉城朝薫の筆によりて詩化されて殘つてゐる。又三輪山の説話の如き蛇神と人間との結婚説話もある。

其外いろ〳〵の神話傳説があつて、何づれの小島もうれ相應のわけまへをもたゐい所はない。神話や宗教の比較研究は両民族間の心理的一致を確むるに至つて必要なるものであるが、こゝでとくはしく述べることが出

來ぬ。神話傳説は慶安の頃に出來た「遺老説傳」に網羅してゐる。(琉球の神話」「與那原の濱物語」參照)

それから琉球の宗教に就いて少ゑく述べて置く必要があると思ふ。今日の沖繩人の宗教思想は可ゐり複雜であるが、ゐの中から儒教や佛教などの分子を引き去つて見ると、日本の神道と殆んど同じ様なもののみが殘る。彼等は日本人と同じく後世は暗黑な所で死人は穢はしいものと思つてゐた。ゐして彼等の神は基督教の神のやうな天主とか世界の主とかいふやうなものではなくて、現に自分等の上にゐて自分等を支配してゐる民族的の神であつた。ゐの外彼等い山の神海の神火の神水の神風の神といふやうに多くの神々のゐることを信じてゐて、王家の神官なる君々や人民の神官なる祝々はゐの時節〳〵にこれらの神を祭つてゐた。水が凋れないやうよ、大風が吹かないやうよ、天下が大平にあるやうに、五穀

が成就するやうに祈つたのである。家内安全とか七難即滅とか七福即生とかいふ個人的の祈願は女官御双紙中の祝詞には絶へて見當らないのである。試に正月弊の御嶽行幸の時の御たかへ（祝詞）をあげて見よう。

弊の御嶽大嶽小嶽いべつかさかなしけふのよかるひよりまさるひよりに　首里天がなし美御前のおちよわいめしわちへ御手づから御拜めーよわるげにさやは嶽さやは森のいべつかさかなしとあいちへなりめしよわちへ御祝物こんで御袖うけめしよわちへ天ぢあめぢとふゑめーよわちへ御月れてだ三つ星七つ星の御前とあいちへなりめしよわちへ首里天嘉那志美御前御年のおやく御月のたやくたやくたしのけめしよわちへ御命のつゐ御星のつないよぢくまぢよく十百年十百歳ぎやでも百かほうのあるやに御守めしよわちへおたぼいめしよわれ又島國のの作物の爲百かほうのあるやに御守めしよわちへ又唐大和の御船

宮古八重山島々浦々の舟上り下りのふ事も百かほうのあるやに御守めしよわちへ御たぼいめしようわ

これ丈けでは日本文化の影響を受けた首府で出來た祝詞であるからあてにならぬと言ふ人があるかも知れないから、日本文化の影響を餘り受けてゐないと思はれる高離島の神人が六月八月のシノゴ祭に神に告ぐる詞を出してみよう。

あまん世のしのご野原米たち出てしちや百姓の祭りしやべらばよがほう御給べめしよわちニライカナイからつゝもんよりもんお助けてに給へめしよわれ國も榮へ代も榮へ諸臣下茂たへ榮へしめらちお給べめ玄よわれ

かくの如く頒延では天神を祭り村落でも氏神を祭り上下一致其家業を勵み、島民も安心して年貢を納めたので所謂島國は安穏であつたのである。

これが即ち琉球に於ける祭政一致の狀態で、上古の沖繩人は上下共にこの祭りを樂みに生きて居た程である。今尙さうであるかも知れぬ。沖繩人は實は「生」の味を忘れることの出來ない人民である。世に沖繩人程その祖先を知りたがる人民は居まい、この傾向がやがて琉　群島の民い皆同胞であることを意識させて、琉球王國の統一を容易ならしめたのである、かつて琉球政府が宮古八重山を同化させた時には政治家を遣すと同時に其地の豪族の女を祝に任命してゐる、沖繩人が蛟惡なる波濤と戰ひつゝ所謂三十六島の民を率ひて一個の國王を建設したといふことは政治的人民たることを証して餘りあり、この点に於ても彼等はゐの北方の同胞に酷似してゐる

次にゐの精神的產物かるオモロの見本を紹介して、ゐれが如何にゐの北方の同胞の精神的產物かる「萬葉」に酷似してゐるかを見る必要がある、「おもろさうし」は二十二冊、歌數總べて千五百五十一首、西暦十三世紀の初葉から十七世紀の中葉まで殆んど四百年間のオモロを收めたので、　の萬葉集ともいふ可きものである、オモロは琉球人の祖先が遺した最古の文學であるが、琉球が島津氏ゐ征服されてから頓に衰へていつしか祭司詩人の專有物となり、元來詩歌といふ意義を有し、ゐたオモロは遂に神歌といふ狹い意義を有するやうになつた　そして近代の祭司詩人は今の神主が神詞を綴るやうに古い鎔にはめてオモロを作つたのである、オモロの中には琉　の創世紀を初として、王者を謳うたもの、英雄を謳うたもの、詩人を謳うたもの、航海を歌うたもの、戰爭を歌うたもの、自然を歌うたものがある。唯一ッ戀を歌うたのもある、世にオモロを措いて琉球固有の思想と琉球古代の言語を研究すべき資料はない試に戀を歌うたオモロから紹介してみよう。

かつれんまみにやごはやておちへ
中ひやくなこみなごはやておちへ
ひるかればきもかよひかよて
よるなれバいめかよひかよて
にしみちのぢやかをちがいきやしゆ
ひがみちのやぎみちがいきやしゆ
ひが道はやぎのおもいぎやまちより
にし道やぢやなのおもいぎや待より
いぢややけな中みちぢよいきやしよ

琉球語を解せない人でも之を讀んだら、直ちに萬葉集中のものを想ひ起すであらう、之を文字通りに譯してみると、「勝連乙女を見てしより、中百名乙女知りてより　袁は心の通ひに通ひ、夜は夢路を辿りに辿り、西

道の謝名道を行かばや、東道の屋宜道を行かばや、東道は屋宜の戀人待てり、西道も謝名の戀人待てり、いでや屋慶名中道をこり行かめ」といふことになる。これでオモロの詩人は天體の美をも謳うたに相違ない。又オモロの詩人は天體の美をも謳うた。

ゑけ　ちがる三日月　や
ゑけ　神きやかなまゆみ
ゑけ　ちがるちかぼしや
ゑけ　神ぎやかなまゝき
ゑけ　あがるほれぼしや
ゑけ　かミが　さしくせ
ゑけ　あがるのちくもは
ゑけ　神がまなきゝたび

「あれ、天なる三日月は、あれ御神の金細射、あれ、天なる群星と、あれ、御神の花櫛、あれ、天なる横雲は、あれ、御神の白布帶」といふ意である。これは琉球人の祖先がその夜の航海中、熟帶の蒼穹を仰ぎ、星昂の燦爛たるを觀て歌うたオモロであらう。調自ら整うて宛然奥妙なる音樂を聞く思かする、而も其想像の雄渾濶大なる、到底梅が枝に鶯の聲を聞いて喜ぶ所の詩人が想ひ及ぶ所ではない。實に年中雲霧に覆はれ勝な幾内に住んでゐた萬葉の詩人はかういふ南國の星月夜を夢にも見なかつたであらう。次に四百年前のオモロ詩人アカインコを歌うたオモロを紹介せう。

あかのおゑつきや
ねはのおゑつきや
ともゝとちよわれ

あーかわのあらぎやめ
くもさうぢあらぎやめ
いゑぎや命てば
石はわれるもの
かねがのちてバ
金はひちやむ物

これは『アカの長者よ、子ハの長者よ、壽かれ、芦生もる小川の流るゝかぎり、汲む寒水の湧き出づるかぎり。君が命を石に譬へバや、石は破れる物あるを如何せむ、君が命を金に譬へバや、金は撓む物あるを如何せむ』といふ意である。琉球人の祖先がどの位その詩人を尊敬したかといふことがわかる。オモロの外に八八八六の調を有する三十字詩もあるがこゝでは省く。たゞ三十字詩はまだ詠む歌と歌ふ歌とに分れない狀態

にあつてどれでも樂器に合せて歌ふことが出來るといふことを述べて置く。（『オモロ七種』參照）

以上言語や神話や土俗や宗教や文學などの例証で、琉球が日本々土と密接な關係を有することがわかつて來たから、今は琉球人の祖先がどうして琉球群島に移住するやうになつたかといふことを述べる場合となつた、先づおもろさうし卷の十にある琉球の開闢を歌うたむかしはぢめからのふしに就いて研究してみよう。

むかし　はぢまりや　てだこ　大ぬ主や
きよらや　てりよわれ
せのみ　はぢまりに
てたいちろくが
てだばちろくが

たさん　しちへ　をおれば
さよこ　しちへ　をおれば
ゐまみきよは　よせわちへ
しねりきよは　よせわちへ
しまつくれ　てゝ　わちへ
くにつくれ　てゝ　わちへ
こゝらきの　しまゝ
こゝらきの　くにゝ
しまつくら　ぎやめも
くにつくら　きやめも
てだこ　うられて
せのみ　うらきれて、

あまてや　もぢや　なもな
ーねぢりや　すぢや　なすな
去やれば　すぢや　なしよわれ

盛に對句が使つてゐる。之を意譯してみると、「最初に日の神あり、美ーく照り耀けり。日の神俯して下界を瞻たまふに、だゞよへる國ありけれべ、アマミキヨ、シチリキヨ二柱の神よ詔りして、之を修理しめ給ふ。二柱の神詔のまに〳〵降りて數知れぬ島々を造りぬ。日の神待ちわび給ひ、うの成るを告るや、更に詔して『うこには天つ國の民の如き者を造る勿れ、然らば人類を造れと宣ひき』といふことになる。之を古事記の開闢の條の一節と比較して見よう

於是天神諸命以。詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神修理固成是多陀用弊流之國。賜天沼矛而。言依賜也。故二柱神立天浮橋而。指下其沼矛畫者。鹽許袁呂許袁呂邇畫鳴而。引上時。自其矛末垂落之鹽。累積成島。是淤能碁呂島。

著しい類似といはねばならぬ。この琉球開闢の神アマミキヨの名は琉球人の祖先が九州から來て奄美大島を經て琉球に來たことを證明する手がゝりになると思ふ。奄美大島の住民も亦自らアマミキヨの後裔と稱してゐる。彼等の口碑によれば、アマミキヨはいじめ海見嶽に天降して大島を經營したが、暫らくの後南の方へ行つたといふことである。栗田翁がうの「姓氏錄考證」に海部氏を海氏の部曲とされたのゝ面白いことである）そこでアマミキヨは奄美や海見と內容上の關係のある事がわかる。して見ると加藤三吾氏がうの「琉球乃研究」で說かれた如くアマミキヨは種族全體の稱であつて一人の名でない事もわかる。併し自分は加藤氏が天孫氏といふのはアマミクの漢譯でアマミクはスマミコ又とアマミキヨーである

との説には贊成しかねる。アマミキヨがアマミとキヨとに切る可き言葉であつて、アマとミキヨとに切る可き言葉でない事はシチリキヨといふ神の名を見てもわかる。又この開闢のオモロにあるアマミヤ、シチリヤの二語を見てもわかる。アマミヤ、シチリヤはこゝでは天つ國の意に用ゐてはあるものゝ、この二語の元來の意味はアマミの家、シチリの家といふ事で、琉球人が昔ゐた故郷をさすのである。即ち海人部の家の義である。オモロは現はれたる琉球古代の人名の語尾よはタダミキヨ、ナオヂキヨの如くキヨが附く。又親にナザイキヨ（生む人）若い人にワカイキヨといふ古語のあるのを見ても、キヨはコ（子）といふ事ではなくて、ヒト（人）である事がわかる。さうするとアマミキヨは天の御子ではあくまで海人部の人といふ事が能くわかる。（琉球語にはエ（e）の短音はないから、メ（me）はミ（mi）となり、ミ（ミ）はb・ビに入りかはる事があるから、ビハミになつたのである。）思ふに海見嶽及び奄美大島の名稱はかつて九州の東南岸にゐた琉球人の祖先が沖繩に來る前に暫らく大島にゐた事を語る最簡單なる歴史である。又琉球人の祖先が九州にゐたといふ事を證明する言葉がある。琉球語でユームー（yumu）といふ事は口の尖つた人にいふ事があるが、これは薩摩の方言ヨモ（yomo）と同語根の語で猿といふ事である。思ふにかつて親しく猿を見てゐた琉球人の祖先が南島に移住するや、屋久島以南よは絶ねて猿を見ないので、その子孫の世になつてはヨモなる語は正しくその實物を指す事が出來ないで、いつしか顔の猿に似た人を指すやうになつたのであらう。それは兎に角沖繩島に於ける彼等の上陸地は何の邊であつたであらう。琉球の上古史は麥粟黍が天然に久高島に生じ、稻苗が知念玉城に生じたと語つてゐる。久高島は沖繩島の南部島尻郡の東海上一哩餘の所にある小島で知念玉城

はその對岸なる島尻郡の一部である。つひ近代まで二月には久高の行幸があり、四月には知念玉城の行幸があつて、國王親ら天神地祇を祭つてゐた。彼の向象賢もうの著『中山世鑑』にこの事を是報本返始之大祭也と書いてゐる。『にもろにさうし』卷の十九（西暦一六二三年編纂）に、

ちゑねんもりぐすくかミおれいぢめのぐすく

といふ事がある。『知念嶽城は神が始めて天降りたる城』といふ意である又

ちゑねんもりぐすくあまみきよがのだてはぢめのぐすく

といふ事もある。『知念嶽城はアマミキヨがはじめて神に祈りたる城』といふ意である。玉城（タマグスク）の百名（ヒヤクナ）仲村渠（ナカンダカリ）の高地にミントンといふ所があつて、此處はアマミキヨが始めて住居した城（グスク）だといふ口碑がある、現にミントン天降（アモリ）と云言葉も遺つてゐる。此に由て之を觀れば、アマミキヨ種族と最初久高島に到着し、それから知念に上陸して玉城に居をトしたのであら

う。玉城の名も亦いくらかうの歴史を語つてゐるやうに見ゑる、琉球語では城のことをグスクといふが、八重山では石垣で圍うだ所をグスクといつてゐる、金澤博士がかつて沖縄教育會で述べられた演説の一節に、

このグスクと云ふ言葉は沖縄人が大和民族であるといふことを證明する好材料とゐるのであります、朝鮮の古語では村のことをスキ村主のことをスクリ（宿稱と同意義）と申しまも。この言葉は日本語にも遺つて日本の位の名にもおつてゐたのでありますが、それと同意義の言葉が日本語では城と書いてシキと讀んで居りまに、大和の地名にシキと云ふ所がありまにが、又シキシマ（敷島）といふ日本國の名にもなつてゐます、シキは城といふことになります。シキといふ言葉を研究して見ると先づ二つに分けることが出來ます。シは住むと云ふ意味で、キは圍（カコヒ）の中と云ふ意味であります。即ち圍の中に住むといふ意になります。（中略）然ら

バ日本語でシキ朝鮮語でスキといふ事は一體どういふ所を指してさう云ふたのであるかと云ふと、高い所にあつて石の壁で取圍まれて居る所といふ意味であります。（中略）それでは日本語のシキも朝鮮語のスキも琉球語のスクも皆城壁といふ意味であります。是等の名詞で正鵠を得た判斷が出來るので、沖繩は敢島即ち日本の一部分であるといふ事は爭ふ可からざる事實であります。歴史がなくとも、傳說がなくとも記錄がなくとも神話がなくとも、沖繩人の祖先は日本人のうれと同じくシキの中に住んで居た事が證明されます。

といふ事があつたが、アマミキヨ種族は沖繩島に上陸して後もグスクを築いてうの中に居たのである。（グスクのグは敬語である。）これらと皆沖繩人の祖先がその北方の同胞と共同なる根元地に住してゐた事を證明する好材料である。

以上の證明で向象賢やチエムブレンの假定說はいくらか確かになつたが、アマミキヨ種族が大和民族と手を別ちて南島に移住したものとすれば、うの當時琉球群島は無人の境であつたであらうか、これ少しく考究すべき問題である。

明治三十七年の夏鳥居龍藏氏が沖繩探檢の結果は端なくもこの問題に解決を與へた。その研究の結果の一端は『沖繩諸島に住居せし先住人民（ウルベツチル）に就いて』といふ論文で三十八年の一月の雜誌「太陽」に出た。これまで沖繩島に石器時代の遺物が存在してゐる事を報告した人といくらもあつたが、それが何人種によつて遺されたものであるかは未だ嘗つて言つた人がなかつた。兎に角これまで發見された石器土器には人種的特徴を示すものがなかつた。然るに鳥居氏が中頭郡中城村字荻堂（ナカグスク　ウシデヤウ）の銀岩（ナンヂヤヒー）の貝塚で發見した土器石斧牙の裝飾形狀輪廓の紋樣等は能くうの人種的表出を

示して日本石器時代のうれと同一系統に屬するものなる事が明かにかつた。即ち沖繩島にアイヌがゐたといふ事はかつた。先是沖繩諸島にアイヌが居た形跡がゐると言つた人は獨逸國のストラスブルグ大學の動物學の教授デーデルライン博士である。博士は奄美大島の住民中に顔面胴部手指共に多毛を以て覆はれたのが多いのを見て、アイヌの血が混じて居ると斷言された、ベルツ博士も亦小倉の師團で大島の兵士百五十人の體格を測つて同樣の事を言はれた。鳥居氏も亦琉球人中毛の多いのが少くかいのを見て、やはりアイヌの血が混じてゐるだらうと言はれた。チエムブレン氏は宮島幹之助氏の材料によつて與那國島にアイヌ的地名のある事を知り、古くは沖繩群島にもアイヌが居たに相違ないと言はれた。實際沖繩群島の地名の中には日本語ではどうしても解けないのがアイヌ語で容易く解げるのがある。琉球では坂の事をヒラ又はピラといふ、肥

後の五ケ莊から五木邊にかけて坂のことを矢張ヒラといふさうで土人の言によれば特に西方日の餘計に當る所ゐいふとの事。又鹿兒島其附近の地方でも坂の事をヒラといふ事がゐるとの事。ピラはアイヌ語の崖といふ事である。沖繩では非常に嶮はしい坂の事をサカヒラといふが、これを古事記のヨモツヒラサカと比較して考へると面白い。本居翁は古事記傳にヨモツヒラサカのヒラを坂の義に解された。その外企武（アイヌ語の山脈）といふ山つゞきの所がある。堅健といふ山間の村落がある。その村を越して具志堅といふ所がある。又遊戸崎、アツタ村（海岸の砂多き所）與那國のソナイ、ヒナイ西表島のソナイ、屋久島（アイヌ語鹿の義）種子島（アイヌ語長きの義）などの如きも確かアイヌ的地名である。又沖繩島及び大島では到る所に鬼（毛人）退治の傳說があるが、これは多分アマミキヨ種族とアイヌと接觸の消息をほのめかしてゐるのであらう

宮島幸之助氏が人類學雜誌第九卷第九十一號に出された「琉球人の入墨とアイヌの入墨」といふ論文には二者の間何等かの關係があつたことを敎える。

鳥居氏は三十八年の四月の「太陽」に「八重山の石器時代の住民に就いて」といふ論文を揭げ、その石器時代の遺物遺跡によつて十五六世紀の頃まで石垣島の獅子嶽の土腹に馬來人が生存してゐたのであらうと想像された。どんなに遲い頃まで八重山に馬來人がゐたとの說には直ちに贊成しかねるが。上古に於ては多分ゐたのであらう。それは與那國島に喫人風俗の傳說があるのを見てもわかる。この人肉嗜慾心の熾なるは馬來人種とパプアン人種とであつて、モンゴリヤ人種には無いから、八重山の英雄が與那國へ渡つて食肉人種を征伐したといふ口碑などは能く南島に於ける琉球人の祖先と馬來族との接觸を想像せしめる。それは又琉球諸島の住民中時として馬來眼を有するのがあるを見てもわかる。

以上述べ來つたところを總合考てると、自然左の如き結論に到達する。白鳥博士最近の說によれば「アイヌ人種の故鄕は亞細亞の高原であつたといふことであるが、彼等は漸次東方に向つて進み、朝鮮半島及び黑龍江一帶の地域に下り、一部はカムチヤツカを經て北海道に入り一部は朝鮮海峽を經て九州に入つたのであらう。思ふに紀元前三世紀頃に於ける天孫人種の大移住は實に九州に於けるアイヌの中堅を突いたのであらう。かくてアイヌの一部は道を東北に取つて中國に逃れたのであらう。神武天皇の一行がゆく〳〵先住民族を征服して大和に入つたことは古史神話の語る所である。チエムブレン氏の說をして眞ならしめば、琉球人の祖先は暫くの後海に浮んで沖繩群島に移住してアイヌを壓したことになる。新しい年代によれば神武の紀元元年は西曆紀元の初年に當るとの事で

あれば彼等が沖繩島に渡つたのは何れ紀元前後のことであらう。

こゝにもまた沖繩教育會に於ける金澤博士の演說の一節を引照して自說を確めてみよう。

言語の研究では他のもので知ることが出來ないものさへ知ることが出來るが、これを適切からしむる爲めゐ沖繩人は何處より來たかといふことに就いて私の考を述べることに致しませう。沖繩人は何處より渡來したのであるかに就いては歷史にもなく、又何等の記錄もないのであるが、言語學上から沖繩人の祖先が九州から來たといふことを証明する二三の事實があります。第一方角の名稱によりて九州から來たことが明かにわかります。先づ日本語アイヌ語及び朝鮮語の三つを比較研究して見ませう。朝鮮語では南韓の事を古くはアリヒシカラ（日本書紀に見ゆ）と申しますがこのアリヒ（Arihi）は今日の朝鮮語のアルプ（Arp）即

ち前（南）と同じ言葉であります。さうもるとアリヒシカラと前の方の韓といふ意味であつて、朝鮮人が北より南に向つて進んだことを証する唯一の言葉であります。日本語のひんがし（東）といふ言葉は日に向ふといふ意味で、日本人も東ゐ向つて進んだことが分ります。又ニシ（西）といふ言葉はイニシ（過去）といふ事であるから自分等が通つて來た所といふ意味であります。アイヌ語で東の事をモシリパ（moshiripa）と申しますがモシリは陸・パは頭といふ意味であります。又西の事をモシリグシ（moshrigesh）と申しますが、ゲシは尻の事であるからこれは陸の尻といふ事になります。この方面に關する言葉の研究から朝鮮人は北より南に向ひ、日本人は西より東に向ひ、アイヌ人も日本人と同じく西より東に向つて進んだといふ事がわかります。今沖繩語を研究して見ますれば、東をアガリ、西をイリと申しますが、大陽の

出る所をアガリといひ、太陽の入る所をイリといふたのは論にるまでもないことであるが、北のことをニシといふのは妙でありまに。何故に北のことをニシといふのか。前にも申去た通り、ニシとイニシ(過去)と云ふ意味であるから、これによつて沖縄人が北より南に向つて進んで來たことが明かにわかりまに。

(沖縄ではむかりはどこでも家のうしろゐ造つてあつて、ニシといつてゐる。)即ち沖縄人が過ぎこし方をニシといふのはこれやがて彼等が北の方九州より南方に來た事を証にる好材料である。

うれから七世紀の頃に南島人がはじめて大和の朝廷に來た事い國史の語る所であつて、當時朝廷では譯語を設けて相互の意思を通じたといふ事があるから、分離後六七百年にして大和言葉と沖縄言葉との間に餘程の差違が生じてゐたと見ゐる。併し九州地方と南島との交通はりの以前

からあつたであらう。これから十二世紀に至るまで沖縄本島の住民が大和又は筑紫に往來してゐたとはオモロを見てもわかる。何よりもよい證據は今日に至るまで琉球人が内地のことを大和といつて居ることである。後世大和は鹿兒島をさすことになつて、明治十二年頃の沖縄人い東京を鹿兒島と區別するに大大和といふ語を用ゐた。島津氏に征服された後琉球人が内地へ行くことをノボル(上國)といつたのは不思議でもないが、五六百年前にも矢張ノボルといふ語を用ゐた形跡がある。オモロ双紙の十の卷、

ありきゑとのおもろさうし(旅行の歌の双紙の義也)に、

くすぬきは　このでぃ
やまとふね　このでぃ
やまとたび　のぼて

やしろたび　のぼて
かはらかいに　のぼて
てもちかいに　のぼて

といふことがある。これは「楠船を造り、大和船を造りて、大和の旅に上りて、山城の旅にのぼりて、瓦を買ひにのぼりて、品物を買ひに上りて、」といふ程の意である。くすぬきは船のことである。神代記の天の石楠船と比較して考へたら面白いと思ふ。こゝに大和に瓦を買ひに行くとあるは一入面白いことである。自分はかつて學友東恩納君と中頭郡の浦添城趾に遊んで、經文を書いた灰色の瓦の破片を澤山發見したことがあるが、その二三を拾つて東恩納君を介して東京なる其道の人に鑑定して貰つたら　これが謙倉時代の瓦であることがわかつた。これで古

くは琉球でも内地から瓦を取り寄せて王侯貴族の家を飾つたといふ事がわかつたと同時に、謙倉時代に於ける内地と琉球との交通が頻繁であつた事もわかつた。また琉球語に謙倉時代の言葉の多く混じてゐる理由の一部は明白になつた。(前にも述べた如く琉球語が今日の日本語と比較して違う所はその言語をその單語並に文法上の形式に於て日本語の古い形特に謙倉時代以前のものが多く遺存せられてゐる事である。これは全く内地では其後世々政治上交通上の變動があつて其影響の爲めに言語上に變轉を來したに拘らず、琉　に於ては只多少政治上の變動はあつたが、他に激烈な變動が無く、さうして言語上に多くの變動を及ぼさなかつた爲であらう。かくの如く昔ながらの日本語も多く遺存してゐるが、頻繁な交通によつて謙倉時代の大和言語の輸入されたのも少くはあるまい。」思ふにパポルといふ語は上古の殖民地人がその母國に對していつた語で

あつて後世日本との政治的關係が付いてから言ひ始めた語ではないのである。どころか間もなく日本々土では南北朝の內亂が起り、南方の沖繩でも三山の分爭が始まり、瀨戶內海や九州の西南岸に海賊が橫行した爲に、二者の交通は全く斷絕した。此間に琉球の中部に割據してゐた中山王察度は始めて支那大陸に通じて臣を朱明に稱するに至つた。先是沖繩島の周圍に散布せる島々及び奄美大島は漸く琉球王國に附屬するやうになり、中山王が支那との交通を開始した時は、その往來の途上に散布せる宮古八重山の住民は自分等以外に自分等に似た人間がゐるといふことを知つて、始めて一入開化せる北方の同胞に身を託するに至つた。かくの如くにして琉球民族の統一は出來たのである。降つて尙眞王の頃（四百年前）に至り、彼等は能く日本及び支那の文明を消化して自家獨特の文化を發揮させた、即ち內にゐつては中央集權を行ひ、たもろさうしを

編纂し、自國語の金石文を刻み、外にあつては支那日本遲羅朝鮮瓜哇呂朱等の諸國と通商貿易をなした。併しアマミキヨ種族の海上王國は島津氏の南下と葡萄牙人の東漸とによつて次第に衰運に傾いた。かくて半死の海上王國は年毎に綾船を發して方物を薩洲に收め、又進貢船を出して貢物を支那に奉つたが、實際に於ては互市貿易を營んだのである。爾來漸く支那に從順なるにつれて遂に綾船を薩州に遣すことが疎かになつたのである。また例の利害得失の考から打算せる結果に過ぎない。然るに豐太閤出て、海內を一統するに及んで、りの朝鮮半島に用ゐたる勢力の餘波は間もなく慶長十四年の琉球征伐となつて現われた。是れやがて琉球の日本に對する經濟的關係を一變して政治的關係となるの關節である。こゝは於てさしも盛なりし尙氏の海上王國は遂に變じて島津の寶庫となり、かつて南洋の津々浦々を遍歷せし波濤の健兒といつしか石原小石原の陸生

動物と化し去つた。それから明治の初年に至るまでの琉球の存存はむしろ悲惨なる存在であつて、言ふに忍びない位である。りこで自分は明治初年の國民的統一の結果、半死の琉球王國は滅亡したが、琉球民族は蘇生して端なくも二千年の昔、手を別つた同胞と邂逅して、同一の政治の下に幸福なる生活を送るやうになつたとの一言でこの稿を結ばう。（明治三十九年十二月十五日稿、琉球新報及東亞之光所載）

（附記）右の論文で、琉球人の祖先はかつて九州の東南岸に居た海人部即ち海人の部落であつたらうと推測したが、現在九州の東南岸に海部とかいふ地のある事は氣が付かなかつた。所が此頃豐後の南海部郡の關といふ人から自分が想像した所に海部といふ魚業の盛な所のあるといふ事や。南海部の大島といふ小島の風俗習慣が奄美大島のそれと似てゐると云ふ事を聞いてヒントを得た。

琉球史の趨勢

この一篇は明治四十年八月十一日沖縄教育會の席上で述べた「郷土史に就いての卑見」といふ演說の草稿に多少の訂正を加へたものである。

私は今日郷土史に就いて卑見を述べ度いと存じます。すなはち琉球の代表的人物が自國の立場に就いて如何なる考へを懷いてゐたかといふことをお話致さうと存じます。一体世の大方の人は琉球史上特殊の時代の人民がはたらき又考へた結果を見て直ちに琉球史を一貫せる精神を捕へようとする傾きがありますが、これは除り宜しくない態度であります。慶長十四年の琉球入りとか明治十二年の廢藩置縣とかいふやうな社會の秩序の甚しく乱れた時代にはいつも感情が働き過ぎる故、一般の人民は正當

に時勢を解釋するとの出來ないものであるが、偉大なる人物は如何なる時代にもその理性を失はないで、正當に時勢を解釋し、且つ衆愚を誘導して、之に處する道を知らしむるのでありますから、吾人はかゝる人物の考へやはたらきによつて、沖縄人の眞面目ある所を知らなければなりませぬ。今こゝに向象賢（シヤウシヨウケン）や蔡温（サイウン）や宜湾（ギワン）朝保の如き琉球の代表的人物を紹介するに先ちて、沖縄人が他府縣人と祖先を同じうするといふ事を述べる必要がありましたが、これはかつて新聞や雜誌に書いた事もあるから、こゝでは申上げませぬ。（「琉球人の祖先に就いて」參照）兎に角今日の沖縄人ハ紀元前に九州の一部から南島に殖民した者の子孫であるといふ事丈けを承知して貰ひたい。さてこの上古の殖民地人は久しく本國との連絡を保つてゐたが、十四世紀の頃に至つて、本國の方では南北朝の戰亂があり、自分の方でも三山の戰亂があつたので本國との連絡ば全く斷絶

して了つたのであります。この時ゟ當つて沖縄人は支那大陸に通じて臣を朱明に稱し盛に其制度文物を輸入したのであります。當時の沖縄人はやがて支那人に扮装たる日本人であつたのである。十五世紀の頃に至つて沖縄島に倚巴志といふ一英傑が起つて三山を一統した時に、久しく斷絶し、ゐた本國との連絡は回復せられ、日本及び支那の思潮は滔々として沖縄に入り、十六世紀の初葉に至つて沖縄人は日本及び支那の文明を消化して沖縄的文化を發輝させたのである。是れ即ち尙眞王が中央集權を行つた時代である。沖縄の萬葉ともいふべきオモロが盛に歌はれたのもこの時代である。沖縄語を以て金石文や消息文を書いたのもこの時代である。而してこの精神は遂に發して南洋との貿易となり、山原（ヤンバラ）船は遙ゟスマトラの東岸まで航行して葡萄牙の冒險家ピントを驚かしたのである。沖縄人はこの時代に於て既に業に勇敢ある大和民族として恥かしく

無い丈けの資格をあらはしたのでありまは。所が両帝國の間に介在するの悲しさ、沖繩人は充分にうの本領を發揮する事が出來ないで、漸く機械として取扱はれるやうにおつたのである。すなはち島津氏は沖繩の位地を利用して當時鎖國の時代であつたに拘はらず、沖繩の手を通うして支那貿易を營んだのであります。しかしながら此頃薩摩と琉球との關係は至つて散漫なる者であつたが、豐大閤が朝鮮半島に用ゐた勢力の餘波は間もなく慶長十四年の琉球征伐となつてあらはれました。是れやがて薩摩と琉球との關係を一變して政治的の關係となすの關節であります。爾來征服者たる薩州人は被征服者たる沖繩人を同胞視しないで奴隷視するやうになりまた。さて沖繩の方では古來國子監や福建あたりで學んで歸つた久米村人が支那思想の代表者で、鹿兒島で學んで歸つた留學僧の連中が日本思想の代表者であつたが、慶長の頃に至つては此の儒者と僧侶とが銘々の職業を離れて政治に嘴を容れるやうにおつてゐたのであります。慶長十四年の琉球征伐は畢竟二思想最初の大衝突に過ぎないのであります。かういふ場合に天下の大勢に通じて自國の立場を知る經世家があつて、能くこの二思想を調和して民衆を誘導していつたならば、かういふ禍を未然に禦ぐ事が出來たに相違ないが、惜い哉かういふ人物は當時一人もおなかつたので御座います。此戰爭の結果、尙寧王以下百餘名は捕虜となつて上國し、如才なき薩摩の政治家は思ふ存分にうの主おき琉球を經營致しました。尙寧王は俘囚とおつて薩摩に在る事二年餘漸く許されて父母の國に歸つたが、さおがら島津氏の殖民地に身を寄する一旅客の樣であつたと申しまも。しかしおがら島津氏は決て琉球王國を破壞する樣な事はしないで、うの形式丈けは保存して置いて之を支那貿易の機關に使つたのであります。征服後島津氏が琉球王をして不相

變支那皇帝の冊封を受けさせたのもこれが爲でも。諸君もし支那の冊封使が渡來にる毎に那覇にゐた二三百人の氣の早い薩摩準人が支那人に見られまいと思つて半年餘の間今歸仁や城間に潜んでゐたといふ事實をた聞きになつたら、思半ばに過ぐる事がありませう。沖繩が日本と交通してゐるといふ事を隱蔽するといふことは管に沖繩のためであつたのみならず又薩摩のためでゐつたのでゐります。沖繩人はかういふ風にして支那に近づき、之によつて得た所の利潤の過半を島津氏に納め、その餘分を以て自立して來たので御座いますが、間も無く支那には明清の大乱が起つて沖繩人は二三十年間も支那に往く事が出來ないやうにゐりました。これは實に沖繩に取つて苦痛であつたのみならず島津氏に取つても亦苦痛でゐりました。この時代のことを俗にフタカチャの御代と稱へてゐまも。沖繩人とこの時支那に使節に遣られるのを非常に嫌つたとの事であ

ります。この時代の沖繩人の頭には支那といふ考へが薄らいで來て、日本といふ考へが強くおつて來たのでゐりませう。丁度日清戰役頃の沖繩のやうに。兎に角沖繩が薩摩に對する惡感情は漸く和いで參りましたが經濟上の困難と一層增して參りました。この時の有樣及びかういふ時に處する道を祭温はその獨物語の中に、

唐世替（革命）程の兵乱差起り候はゞ進貢船差遣候儀不罷成或は十四五年或は二十年三十年も渡唐絶行仕儀案中ゑ候御當國さへ能々入精本法を以て相治置候はゞ至其時も國中衣食並諸用事無不足相達尤御國元（薩摩）への進上物い琉物計にて致調達其御斷申上可相濟積に候若御政道其本法にて無之我々之氣量才辨迄を以相治候はゞ國中漸々及衰微御藏方も亡至と致當迫候儀決定之事に候右之時節渡唐斷絶候はゞ御國元へ進上物の儀琉物調も不罷成言語道斷之仕合可致出來候

と言つてゐます。沖繩の立場ハ實に苦しい立場であつたのであります。

沖繩の立場が以上申し述べた通りでありますから、沖繩人に取つてハ支那大陸で何人が君臨してもかまはなかつたのであります。後世靖南王が叛した時の如き、琉球の使節は清帝及び靖南王に奉る二通りの上表文を持參していつたとのことであります。又不斷でも琉球の使節は琉球國王の印を捺した白紙を持參してゐていざ館倉といふ時どちらにでも融通のきく樣にしたとのことです。この紙のことを空道（コウダウ）と申します。沖繩人の境遇、大義名分を口にもるのを許さなかつたのである。沖繩人は生きんが爲には如何なる恥辱をも忍んだのである。「食を與ふる（クヰユ）者は我主也（ヌシナリ）」といふ俚諺もかういふ所から出たのであらうと思ひます。誰が何といつても沖繩人は死なない限りは自ら此境遇を脱することが出來なかつたのであります。これが廢藩置縣に至るまでの沖繩人の運命であります。

朝が亡んで清朝が興りましたので、沖繩は暫くの間名實共に日本に屬するやうになりましたが、島津氏の方でも琉球を如何に取扱つて可いやらわからなかつたのであります。島津氏の方にも機を覗て琉球の両屬を止めようと圖つた人もゐたと見えて、十九代の君主光久の如きは正保三年には明國が政を失して戰亂が止む事のないのを聞いて、此際意を決して沖繩を處分せむ事を幕府に諮つた事がありました。又明暦元年には愛親覺羅氏が支那一統の餘威を以て新ま使節を沖繩に派遣するといふ噂を聞いて、沖繩をして清國との關係を開くやうな事の無い樣にさせて貰ひ度いと幕府に願うた事もありました。もし此時島津氏の建議が採用されてゐたら、沖繩は二百年前に支那との關係を絶つてゐたのでありませう。しかしながら德川氏の平和政策は此新興の强國と國交を開く事を恐れて斷然たる措置に出づる事が出來ずかつたのであります。沖繩は依然とし

て清朝の冊封を受けて其正朔を奉ずる樣になりました。こゝで諸君はは清戰爭の頃まで清國を慕うてゐた所の久米村人が此時どんな態度を取つてゐたかといふ事を問はれるでありませう。王代記といふちよつとした本によれば、彼等は寛文の頃まで大明の衣冠をつけてゐたが、寛文三年清國の使が琉球に來た時、斷然片髮を結んで國俗に順つたといふことであります。彼等は實にうの母國朱明の滅亡を嘆きつゝあつたので御座います。以上御話申上げたとで日支兩國間に於ける沖繩の位置はわかりになつたらうと思ひます。これから本論に這入つて向象賢や蔡溫や宜灣朝保がこの間に處していかゝ考へ又はたらいたかといふことをお話いたうと存じます。

明國の滅亡後暫らくの間島津氏が琉球の處置に困つてゐたことは前に申述べた通りであるが、琉球自身は尙更自身の處置に窮してゐたので御座

います。當時具志川王子尙亨といふ賢相があつて政治を執つてゐましたが、餘程の道德家で時の人ゝ之を聖人と稱へてゐました。或時罪人が死刑の宣告を受けたところで、尙亨聖人もこのことを知つて居られるかと問うた。聖人はとうに知つて居られるとの答へを聞いて、罪人は安心して刑に觸れたといふことがあります。尙亨は此通り偉い人でありましたが、當時の琉球をどう處置して可いやらわからなかつたのであります。或時小さい男の兒が乳母に抱かれて京太郎の舞を見てゐたが、尙亨かつくづくとこの兒の瞳を視ていふには、私は未だ嘗つてこんなに器量の優れた兒を見たことがない、後日私に繼いで政柄を秉り、琉球に金の輪をはめるのはこの兒であらうといつたことで御座いますが、この寧馨兒こうは他日薩摩と琉球とを融和させた所の羽地按司向象賢であります。この話は決して通常の作り話としてきゝ流してはありませぬ、この中には尙亨

がいたく沖繩の將來を氣遣つて誰ぞ自分より偉い政治家が出でゝ時勢を解釋去て呉れゝば可いがと願つた心が能く現れてゐまに。向象賢と果去て沖繩に金の輪をはめました。彼れは國相となる三年前、即ち慶安三年、とじめて沖繩の正史中山世鑑を編纂して自國の歴史を敎え、國相となつてから「仕置」を出して其の政見を述べました。「仕置」は實に後世爲政者の金科玉條として遵守もる所のものでありまに。向象賢とりの劈頭第一に、先づ國相具志川按司の跡役に就いて大和に伺つたら、自分に仰付けられたといふことを書いてゐまに。今この書を通讀して向象賢の眞意のある所を見ると、頻りに「大和の御手内に相成以後四五十年以來如何樣御座候而國中政衰微候哉」と嘆じ、島津氏ょ征服されて後は、士族が自暴自棄になつて、酒色に耽り、社會の秩序がいたく乱れたのをこぼしてゐます。さうして彼れは之を救ふには經濟上やりの他の事に於て

常に消極的の手段を用ゐ、又薩州と琉球との間に精神上の連絡を付けることを得策と思ひました。諸君は言語の比較から日本人と琉球人とが同一の人種であるとの說を始めて稱へた人を言語學者チエムブレン氏と聞いて居られるかも知らぬが、これはチエムブレン氏ではなくて、吾が向象賢氏であると心得て貰ひ度いのであります。向象賢は例の「仕置」の中に

　　竊惟者此國人生初者日本より爲渡儀疑無御座候然者末世之今ょ天地山川五形五倫鳥獸草木之名に至る迄皆通達せり雖然言葉の餘相違者遠國之上久敗通融爲絕故也五穀も人同時日本より爲渡物なれバ云々

と書いてありまに。當時沖繩人が薩摩に對して惡感情を有つてゐた時に向象賢と日琉人種同系論を唱へたのでありまも。これは兎に角二者の感情を融和したのでありませう。向象賢は又「仕置」の中に以後士族として

　　攀文算勘筆法謠。醫道庖丁。馬乘。方。唐樂筆道茶道。立。花。等の中何か一つ嗜んで

あるい者はどんなに身分の善い者でも官吏には採用しないぞと書いてあります。諸や茶の湯や生花のやうな日本の藝術を奬勵した所などは餘程面白い所であります。諸をうたひ、花をいけ、茶をのんでゐる間に、沖繩人は大和心になつて了つたのであります、これまでは薩州と琉球との關係は經濟的政治的でありました、こゝに至つて一歩進んで精神的となりました。彼れは又或時三司官に敎書を示して、

右七ヶ年の間夜白盡精相勤候付國中之仕置大方相調百姓至迄富貴に罷成候儀乍憚非獨力哉と存候依之根氣疲果候且復老衰極致勤仕時節到參候斷申候憐愍被思召赦免可被下候左候而二三年も存命候はゞ本望不可過之と存候縱拾年、弐拾年勤候人も僅此中之七ヶ年には不可勝候頃日內證より右斷之段申上候處先以被召留候返事被下候此趣を以宜敷樣願存候以上

と申しました。實に自信の强い言ひ方であります。この「仕置」を讀んで行くとこの獻身的の政治家が七ヶ年の間に制度を改め政綱を張り農務を起し山林を開き島津氏の征伐後の財政を整理するに人並からぬ働きをなしたことが能くわかります。（附錄四「仕置」參照）かれは殘りの三ヶ年は專ら敎化事業に力を致したのであります。「仕置」の結尾の所には、

右之仕置大方に候而御國元より國之下知未斷之故國俗壞行候儀役人之曲事と被仰付候はゞ我々可及迷惑候間前以申出候若恨に被存人は羽地合手に可成候少も一身惜不申候國の恥辱には出間敷候如何樣返答可承候

と書いてあります。千鈞の重さのある所です。彼れは實に尙亨が豫言した通り、沖繩に金の輪をはめて延寶三年（西暦一六七三）に此の世を辭しました。而して他日此基礎の上に近代の沖繩を建設すべき蔡溫はまだ母

の胎内にも宿らなかつた。蔡温は彼れの死後七年にして呱々の聲を擧げました。

すべて社會の事はりの方針を定めるのが六ケしい、りの方針さへ定まれば、自ら時勢が導いてくれるので御座います。向象賢死後の沖繩はトン〳〵拍子で向象賢が指定した方向へ進んだので御座います。向象賢の死後日本との交通は頗る頻繁となり、王子や貴族の年毎に薩摩や江戸に出かけるのが多くなり、支那との往來も昔のやうに續けられて、親方や官生の支那に遊ぶのも少くはなかつた。

さうして當時沖繩人が朝聘觀風する所の兩國を見るに、一方は八代將軍幕府中興の時にして、他方は清の聖祖が兵亂を平げて文學を奬勵するの秋であつた。就中江戸及び北京の文運が將に花を開かうとした頃には、自家も亦古今未曾有の黃金時代に到達してゐたので御座います。これや

がて兩國の文明が海南の小王國に於て調和したのである。沖繩ではこの時程澤山の人物を出した例はありませぬ。沖繩で古今獨歩の政治家と呼はる〻具志頭親方蔡温も、沖繩ではじめて劇詩を作つた玉城親雲上向受祐（朝薫）も、苦の下若草物語萬歳貧家記雨夜物語等を物したる平敗屋朝敏も、仲島のよしや、恩納なべ等の女詩人も、この時代に輩出致しました。久米村の方々も無數の漢詩人が輩出致しました。恩納なべが、

波の聲もとまれ風の聲とまれ首里天加那志みおんき拜ま

と謳歌した時代は即ちこの時代であります。而して蔡温は實にこの時代を代表する所の偉大なる人物であります。彼れは島津氏の琉球征伐の時犧牲になつた支那思想の化權若那親方鄭迥の產地久米村に呱々の聲を擧げた者で、明の洪武年間支那思想を齎らして沖繩に歸化した所謂三十六

姓中の門閥宋の蔡襄が子孫であります。政治的天才を有してゐたので、格外から抜擢されて三司官（サンシクワン）（大臣）におつた者であります。彼れは向象賢とは別で、支那系統の人で、而も若い時支那で學んだ人であるが、彼れの活眼なる、夙に沖繩の立場を洞察して、向象賢の政見を布衍してゐます。彼れの自叙傳を讀んでみると、如何に彼れが活學問をしたかといふことがわかります。彼は二十七歳の時に進貢（チンコン）存留役を仰付けられて福州に渡り、二十九歳の時に國へ歸つたのでありましたが、その間に或隱者（多分陽明學者であつたでせう）に會つて、心機一轉をしたのでありました。彼れは隱者から「文章はどんなに上手に綴つても、書物はいくら澤山讀んでも、それは藝人同樣で學問とは違ふ、幸君はまだ若いから、一所懸命に學問をしたら、一身の爲は申すに及はず君の爲國の爲になる四書五經や其外賢傳の書は何れも誠意治國の事を述べたのである、然るに君は

誠意治國の大主旨はそつちのけにして道樂半分に書物を讀み、文章を綴つてゐる、これ畢竟身を忘れ國を忘れる仕業で、藝人よりも遙に劣等だ……君がいくら書物を讀んだといつて、それは文字の糟粕を嘗めた迄で其内の眞味を味はつたのではない云々」といふ言を聞いて、夢の醒めた樣に自覺したのであります。一度自覺して見ると、彼れの目に始めて影じたのはその母國琉球の憐れなる境遇であつたのであります。世に酔生夢死の同胞の眞中に獨り醒めてゐる人程寂寥を感ずる者はありますまい蔡温は旅寢の空に幾度かかゝる悲哀を感じたのでありませう。彼れいかゝる時父母の國を救ふべき責任を一層強く感じたのでありませう。彼れは常に或問題（多分琉球を如何に去て經營もべき乎といふ問題）を念頭に置いてあらゆる本を讀み、あらゆる事物に對したのであるから、あらゆる知識は能く消化されて、彼れの頭腦は多角的となつたのである、又

支那滯留中一切經さへも讀破したといつてゐる。かゝる種類の人は時勢の解釋者としては最もふさはしい人であります。私は彼れの自叙傳を讀んで始めて三四十年間の彼れの活動の偶然でないことがわかりました。諸君がもし彼れが書いた「獨物語」や「敎條」を繙かれたら、その注意の永遠に渉り、その政略の適切なる、眞に琉球第一の政治家として、又或意味に於て一個の外交家として、民衆を誘導し、敎訓し沖繩群島の住民を可憐なる狀態から救うたといふことがおわかりにありませう。彼れは向象賢よりもヨリ大なる時勢の解釋者でありました。彼れは時勢の謳歌者ではなくて寧ろ時勢の作爲者でありました。向象賢と沖繩を經濟的に救つて、更に沖繩人の向ふべき方針を暗示致しましたが、「人間實理實用之道有形無形共其祕旨」を授けられた蔡温は向象賢が造つた餘裕を利用ゑて、沖繩人をしてたゞ租稅を拂うて生るといふ外に、更に人間としてな

さなければならぬ事が澤山あるといふ事を敎ゑました。彼れの「獨物語」は向象賢の「仕置」をまねて書いたものと思はれるが、その中に自國の立場についての考へを露骨に言ひあらはしてゐまに、

毎年御國元（薩摩）へ年貢米差上候儀御當國大分御損亡の樣に相見得候得共畢竟御當國大分之御得に相成候次第誠以難盡筆紙譯有之候往古者御當國之儀政道も然々不相立農民も耕作方致油斷物每不自由何篇氣儘之風俗段々惡敗剩世替（革命）之騷動も度々有之萬民困窮之仕合言語道斷に候處御國元之御下知に相隨候以來風俗引直農民も耕作方我增入精國中物每思儘に相達今更目出度御世に相成候儀畢竟御國元之御蔭を以件之仕合筆紙難盡御厚恩と可奉存候此段は御敎條にも委細記置申候

實に其通りであります。蔡温は島津氏の許す範圍內に於て、支那の制度文物を輸入して三十六島の人民を敎化し、理想的の國を建設するといふ

考へを懐いて居りました。彼れは實際この両大國の間に介在して出來る丈けの事はなしたので御座います。去かしながら彼れが「獨物語」中に

往古之聖人も政道之儀は夜白入精候慎縱令ば杓手繩にて馬を馳せ候儀同斷と被申置候

といつた通り、琉球政治家の苦心は一通りではおかつたのでありました。蔡温は又「獨物語」の中に國家を上中下の三段に分ち、その各をまた上中下の三段に分ち、都合國家に九段の別かあるといふ事をいつて居ります。うして下國之下段であつても、政治其宜しきを得たならば、うれ相應に安堵之治が出來る、といつて暗に琉球の樣なひどい處にもやりやうによつては、理想國が實現せられるといふ事をほのめかしてゐます。世界氣の毒な政治家多しと雖琉球の政治家程氣の毒な政治家はゐないかと存じます。戰々兢々として薄氷を蹈むが如しといふ語は能く琉球政治家

の心事を形容にる事が出來ます。しかしながら獨り蔡温は其生涯中少しも困つたといふ風な態度をあらはしたことはなかつたのでありました。この事は彼れの自叙傳を讀んでもわかるだらうと思ひます。こゝが蔡温の偉大なる所で御座います。

さて蔡温時代のやうに二個の思想が調和してゐる時分には、一般民衆は動もすれば各其好む方に偏して、自國の日支両國に對する關係を正當に觀ずる事が出來ないのでありります。もし之を自然に任せて置いたならば、両大國の形勢が一變した曉には、沖縄は再び慶長十四年の時の樣な悲境に陷る事があるので御座います。蔡温は早くもこゝに氣がついて、御教條を發布して、沖縄が日支両國に對する關係の輕重如何を極めて叮嚀に教えましたが、その主意を解にるものが至つて少く、士族の連中は何づれも四書五經ばかりを金科玉條として遵守し、御教條は百姓の教科書

であるといつて輕蔑するやうになりました。惜ぢみても猶餘りあることであります。（この御教條を見て薩州人も大よ安心をしたとの話がある。）

それから蔡温と「獨物語」の中に、

國土之儀眼前之小計得にては絶て安堵之治罷成不申積に候依之政道と申は必國土長久之御爲に大計得を第一に心掛相働申由聖人被敎置候」

といつて行末の事まで考へてゐたのであります。實際彼れはもく〳〵は琉球は全く支那の手を離れて、專ら日本に屬するやうにあるだらうといふ事をほのめかしてゐます。勿論この事は記錄にも何にも書いてありませぬが、蔡温が尙敬王に申上げた忠告として尙敬王以來口々に傳へられて今日に至つたのであります。これはかうである、

支那との事はさう六ケしくはありませぬ、よし六ケしい事がおこつても久米村人丈けでとりなしが出來ます、しかし日本との事はさうは參

りませぬ、他日一片の書狀で國王の位を失はなければならぬ事がある。とすれば、それは日本の方から出るのでありませう。

との事であります。これは明治十二年に首里城を御立退の時分、尙泰王が安里氏に話されたとの事であります。これは安里氏が那覇尋常高等小學校の訓導富名腰氏を通じて私に告げられた事であります。決して嘘でないといふ事を誓つて置きます。蔡温はあゝいふ泰平の時代に能くもかういふ事を豫期してゐたのであります。よしや此話がないとしても「獨物語」を熟讀された方にはかういふ事はとうに蔡温は考へてゐたらうといふ事を推察されませう。蔡温は「獨物語」や「敎條」に爲政者の執るべき方針を規定云て置きましたが、おほ平常の事務に關しても細しく記載して置いて、その死後どんな人が三司官になつても、之を繙きさへすればどんな時でもまごつくことのないやうにしたとのことです。さうであ

りますから琉球最後の政治家宜灣朝保氏と蔡温以後と四人の三司がある といはれたとのことでも。實際三司官は三人しかないが、死んだ蔡温がいつも三司官と一緒にゐて、政治を執つてゐるやうなものだといふ意であるさうです。蔡温は實に好個の知己を得たといはなければなりませぬさうして宜灣朝保の出現も亦偶然でいなかつたのであります。星移り物變り、世は御維新となりました。即ち日本人は國民的統一をなすべき機運の到來を自覺するやうになりました。この時にあたつて沖繩人の心中に當然起らなければならぬ疑問は自國の運命いかどうなるであらうかといふ事であつたに相違ありませぬ。ところが沖繩人はこの大問題に就いて至つて無頓着であつたのであります。前にも申上げた通り所謂琉球王國は慶長十四年以後は日本の一諸侯島津氏が故更に名に於ては支那に屬せしめ實に於ては日本に屬せしめて私かに支那貿易を營む爲に存在させた

機關に過ぎないのであるから、その存在の條件がなくなるや否や動搖を來したのは當然のことで御座いまも。御維新になつた結果琉球は最早島津氏の機關でないやうになつて、當然日本帝國の一部たるべき性質の者となりましたので、とう〳〵琉球處分といふことが起つて參りました。沖繩人に取つては寢耳に水であつたので御座います。これやがて日本思想と支那思想との最後の大衝突である。斯る時に際し、人は往々にして大勢の推移を知らず、前後を同一の時代と觀ずることがある。こゝに於てか人と時勢と相副はず、その間に杆格を來すのである。これ社會に保守黨の起る所以である。これ社會に援亂の避くべからざる所以である。宜灣朝保は此間に立つて時勢を解釋し、輿論を無視して沖繩を今日の樣な位地に置いたので御座います。而して彼れは非常なる迫害を受け、明治九年憂を懷いて死にました。彼れは實に不幸なる政治家であります。しかるに

から、彼れは幕末の勝安房や朝鮮の李安用と並稱せらるべき人物であります。

つら〳〵琉球史の趨勢を見るに、向象賢や蔡温や宜灣朝保の案内もるが儘に、歩一歩安全なる世界の大勢といふ潮流に向つて進んだので御座います。而して私共はこの大海のたゞ中の甲板上に立つて、私共を出口まで引張つて來た所の三人の恩人を顧みて、轉た感謝の念を熾にせざるを得ないのであります。かつて向象賢や蔡温や宜灣朝保と共に窮屈千萬なる天地に住んでゐた所の沖繩人は、今や天空海濶なる世界に住むやうになりました。さうして政治的壓迫を取去られた所の沖繩人は三人者が言はんと欲して言ふ能はざりし所を言ひ、爲さんと欲して爲す能はざりし事を爲し得るやうになりました。去かしながら沖繩人がかういふ所に到達する迄には幾多の困難に遭遇したといふ事を知らなければなりません。

この苦しい經驗も亦沖繩發展の一要素になつてゐるに相違ありません。それはさておき世界の大勢日本の革命琉球の弊政は皆琉球の處分を容易ならしめた所のものでありますが、向象賢や蔡温が作つた琉球史の趨勢は一入之を容易ならしめたのでありまして、只今奈良原知事も仰しやつた通り、琉球問題は實に能く朝鮮問題に似通つてゐます。これは歴史家のとうに氣がついてゐる所で御座います。恐らくは現今日本の政治家は慶長以來琉球で得た所の經驗で以て朝鮮を經營しつゝあるので御座いませう。朝鮮の今後の成行も大方想像もる事が出來るので御座います。去かしながら二者は單に形式に於て似てゐるので、其實質に於ては大に異なる所のものがあるので御座います。何いさておき人種上から言つても、朝鮮人と日本人とは遠い親類の關係でありますが、日本人と琉球人とは一人の母から生れた姉妹の關係であります。「琉球人の祖先に就いて」

（參照）島津氏の琉球征伐時代に出來た。「喜安日記」といふ本を繙いて見ると、「古老人云所を祖母の思をなし日本を祖父とせよと云へり」といふことがあります。明治初年頃の沖縄人は支那を母とし日本を父としてゐたのであります。二三百年の間に祖父母の關係が父母の關係に變つたのを見ても歴史趨勢を見ることが出來ます。琉球處分は實に迷兒を父母の膝下に連れて歸つた樣なものであります。ところが此球球民族といふ迷兒は二千年の間支那海中の島嶼に彷徨してゐたに拘はらず、アイヌや生蕃みた樣にピープルとして存在しないで子ーションとして共生したので御座います。彼等は首里を中心として政治的生活を營みました。萬葉集に比較すべきおもろさうしを遺しました。マラッカ海峽の邊まで出かけました。さうして彼等の北方の同胞がかつて爲さなかつた所の自國語で以て金石文を書くことをなしました。彼等は實に物質的にはた精神的な國家社會

を形成にべき能量を有してゐたので御座います。

さて萬象の進化は不滅なる恒力の効果たる一定の加速度を以てするのであります。琉球民族の進歩が獨りどうしてこの加速度の理法にうむく事が出來ませうか。前時代の制度文物なくして何處に琉球がありませうか。嚴格なる意味に於ての琉球はアマミキヨ以來凡ての人の考へやはたらきが積り積つて出來たのであります。個體の享有にる仕事即ち經驗の有限なる個體の生存に殘存し、生殖の連鎖によつて、關鍵もる種族の全體に寓ぜて恒久不滅の存在を有にるものであります。これやがて遺傳の理法であります。加速度は段々增して來ました。過去に於ける如き抵抗は全く絶滅或は減退致しました。今日以後の沖縄人に向象賢や蔡温以上の仕事の出來るのは火を睹るよりも明かであります。しかしながら彼等以上の人物たらんとするには彼等が遭遇した以上の困難に遭遇せねけれ

ばならないかも知れませぬ。私共は私共にかくの如き遺傳を與へてくれた祖先を尊敬しなければなりませぬ。これやがて自分を尊敬するのであります。私は斷言します。沖繩人い過去に於てあれ丈けの仕事位はなしたから、他府縣の同胞と共に廿世紀の活舞台に立つことが出來るのであります。アイヌを御覽おさい。彼等は吾々沖繩人よりも餘程以前から日本國民の仲間入りを去てゐます。しかしながら諸君。彼等の現狀はどうでありませう。やはりビーブルとして存在してゐるでゝゐりませぬか。不相變熊と角力を取つてゐるではありませぬか。彼等は一個の向賢象も一個の蔡温も有してゐおかつたのであります。周廻百里位の小天地にゐたからといつて、蔡温の如き政治家を內地の一地方の家老位と比較するのは誤りであります。琉球政治家の活動の範圍は北京から江戸の間にひろがつてゐたのでゐります。而も年百年中大變な難問題にのゝ出會しつゝあつたのでゐります。私は蔡温の如きは明治以前の各藩のどの政治家よりも遙かに活動してゐたと信じます。もし彼れを檢束してゐた運命の繩をゆるめたならば　彼れい思ふ存分に活動去て支那海の一偶に一種のユートピヤを出現せしめたに相違ありませぬ。兎に角彼れは沖繩にはもつたいない位な大政治家でゐりました。私は諸君が虛心平氣に琉球政治家の苦心の跡を追想せられんことを希望いたします。

終りに臨んで、私は明治十二年以來日本政府が如何に琉球を社會化去たかといふことを述べ、ついでに教育家諸君に對して私の希望を述べようと思ひます。

沖繩の最近世史は社會學上に於ける所謂社會化（ソシヤリゼーション）の好適例で御座います。社會化と申すのは或社會が個人若しくは群の一體若しくは他の社會を化して自個の社會の成分若しくは部分となす事業のことでありまして、

りの作用が自衛的と他攻的の二つに分れます。前にも申上げた通り沖縄人は日本國の建國以前に南島に分れて來て國を建てた日本人の一支族でありましたが、二千年の間に自然變種にかつた者であるといふことは誰れも疑はない所で御座います。さて沖縄の立場が既に申述べた通りでありますから、沖縄人の日本々國に對する感情は、親しむといふよりは寧ろ畏れるといふことで御座いました。いちめる人をこわいと思ふのは人間自然の情であります。之に反して沖縄人が支那に對する感情は、畏れるといふよりも寧ろ親しむといふ方で御座いました。恩をきせる人を親しいと思ふのも亦人間自然の情でありました。これ廢藩置縣前に於ける沖縄人の感情をありのまゝにいひあらはしたので御座います。こゝらは日本國民の三省なければならぬ点と思ひます。かういふ有樣でありましたから沖縄人の親しむといふ感情は凡て直接に彼等を保護し誘導する所の尙家

に向つて傾注されたので御座います。此感情が段々つのつて忠義の念となり、遂に世道人心をつなぎとめる縄となつたので御座います。實に明治の初年まで政治及び社交の中心であつた尙家はやがて沖縄全体であつたのであります。所が琉球處分いふ政治的津浪によつて尙家と最早政治の中心でないやうになりましたが、なほ社交の中心ではあつたのでありました。社交の中心丈けを維持してゐた所の尙家が自個存立の基礎を搖がし存立の要性を弱むるが如き外來の勢力に對して之に抗拒する所以の方法勢力とあるべき自衛的社會化を講じたのと人情として己むを得ざる所であつたので御座います。即ち日本の社會と接觸するに際し個人の琉通からして其統一及び鞏固の幾分弱めらるゝを補ふ爲めに一方に於ては沖縄人の内地人に接觸するのを禦ぎ、他方に於ては理想的に舊社會の扶殖宣揚を期せしめ、飽くまでもつの數百年來の小朝廷を維持せむと力め

たので御座いまし。御維新の時に日本國内の各藩でさへ國民的統一の事業に反對して戰つた位でしたから、半ば外國視されてゐた琉球がかういふ反抗をしたのは決して怪むに足らないので御座います。沖繩では血を流さなかつただけそれ丈け手やはらかなまぬるい反抗をつゞけて日清戰爭の頃に至つたので御座います。（沖繩人が廢藩置縣の時に血を流さなかつた理由に就いては「進化論より觀たる沖繩の廢藩置縣」參照）何人も大勢に抗することは出來ぬ。自滅を欲しない人は之に從はねばならぬ。一人日本化し二人日本化し、遂に日清戰爭がかたづく頃よはかつて明治政府を罵つた人々の口から帝國萬歳の聲を聞くやうになりました。大勢に抗した義村按司（ヨシムラ）は命のある限り反抗してとう〳〵福建で死んだ。死んだのみならず頑固党の首領といふ難有い名を一人で背負つて死にました。これが自衛的社會化の結論であります。それから日本人がこの自衛的社

會化の繩張り内に這入り込んで如何に他攻的社會化をおしたかといふことを御話いたしませう。他攻的社會化といふのは社會が外に向つて增進的擴大を爲す時に見る所の社會化であつて、これにも積極的と消極的の二通りあります。積極的社會化は通例單に社會化と申して、自個以外の社會を化して、自個社會の完全なる部分とおもふ事で御座います。その方法は他社會の衆人と我社會の衆人との間に血緣及び生活狀態の關係を通じ他社會の全部若くは各部を我社會の制度の一部として有機關係を成し社交性を彼我の衆人各個の間に普及し、併せて彼の調子を我のに同化し我の社會性を彼に及ぼし自然的より意識的に、意識的より理想的に進ましむるゐ在るので御座います。ところが積極的社會化の直に實行すべき場合は社會的抵抗力の薄弱若くハ皆無なる社會を社會化する時のみであつて、多少の發達を成就せる社會を我に化せんとするには、必ず先づ消

極的社會化を成すの必要があります。沖繩の如く二千年間隔離して存在し、而も七百年來發達せる國家を形成して、盛に自衛的社會化を講じてゐた所の社會を社會化せんとするに當つて、日本政府が先づ消極的社會化を講じたのは已を得ない次第で御座いました。消極的社會化はやがて國性剝奪であります。日本政府は即ち琉　王國を廢去てうの國家制度を滅却せしめ、風俗習慣制度等を滅却せしめようとしたのであります。衆人社交性の調子の整一を攪乱させて社交性を薄弱ならしめたのであります。うの理想的社會性を攻擊して一敗地に塗れしめ、意識的社會性を攪乱し摩痒せしめ、社會性の意識の衆人に存するなきに至らしめ、遂に社會性の自然的存在を滅却させようと力めたので御座います。そこで諸君は尙家が政治上の中心でないやうになつたと同時に、社交上の中心でもないやうにあらうとした重なる理由がおわかりになりましたらう。思ふに、

今日のやうに理想的に社會性の扶殖宣揚をなすまでの當局者の苦心も一通りではなかつたのでありませう。しかしながら沖繩人の心中にも亦之をして一層容易ならしむるものがあつたといふことを忘れてはありませぬ。これは沖繩の社會的抵抗力が薄弱若くは皆無であつたといふことではありませぬ。社會的抵抗力は強かつたが、化するものと化されるものゝ心中に一致するものゝ存在するといふことがわかつて、急に打解けたのであります。この一致し、あるものは當局者の大に利用すべき所であつたに拘はらず、久しく利用することが出來なかつたのであります。これは當時沖繩の研究が足らなかつた故であります。明治五年琉球處分に就いての左印の意見を讀んで見ると「王を華族に列するは斷じて不可也抑も華族は神別を以てこれに任じ皇室の藩屏たり今琉球人たる琉球王を以て我華族に列すれば國内の人類に附したる等級に他國人を混ずるものな

り」と云ふことが御座います。これ皆歴史的に傳はつて來た感情の遺物であります。私は沖繩人がこの一致してゐる所を大に發輝させるといふことは即沖繩人をして有力なる日本帝國の一成分たらしむる所以のものであらうと存じます。もしもこれまでの隋力で琉球固有の者をかたつぱしからぶちこはさうとする人があつたら、これとりもなをさず、両民族の間に於ける精神的連鎖を斷切るのであります歴史を無視するのであります。只今申上げた通り一致してゐる点を發輝させることはもとより必要な事で御座いま が、一致してゐない点を發輝させる事も亦必要かも知れませぬ。『これは藝術の方面に向はうとする沖繩人に取つては特に必要なる事でありませう。一致してゐない点といへば少しく語弊がありますから他人がまねる事の出來ない点といつておきませう。私は何人も他人の到底まねの出來ない特質をもつてゐると思ひます。各人がもつてゐる所の個性は無雙絶倫であります。即ち各人は神意を確實に且つ無雙絶倫なる狀に發現せる者であります。換言すれば各個人はこの宇宙にあつて他人の到底占め得べからざる位置を有し、又他人によつて重複し得らるべからざる狀に神意を發現するものであります。（ロイス氏「世界と個人」參照）此に由つて之を觀れば天ゝ沖繩人ならざる他の人によつて決して自己を發現せざる所を沖繩人によつて發現するのであります。即ち沖繩人微りせば到底發現し得べからざりし所を沖繩人によつて發現するのであります。個性とは斯くの如きものもあります。沖繩人が日本帝國に占むる位置も之によつて定まることと存じます。遺傳の理法を考へると、個性はどうしても無くもることの出來ないものであります。もし沖繩人にしてその個性を無くにることが出來る人がゐたら、これとりもなほさず、精神的に自殺したのであります。蓋し國家の損失之より大ある

219604

ものはありますまい。日本國には無數の個性があります。又無數の新しい個性が生じつゝあるのでありまは。かくの如く種々の異なつた個性の人民を抱合して餘裕のある國民が即ち大國民でありまは。私は他人の個性を尊敬にるとはやがてうの國家に忠なる所以と思ひます。先達高島講師が心理學の講義で、教育家は兒童の心中に美質があるといふことを信じて之を尊敬しかければ眞の教育は出來ないといはれた通り、政治家も亦沖繩人の心中に美質があるといふことを信じて之を尊敬しなければ、眞の教育は出來ないだらうと思ひます。化される人がおづいて來ても、化す人が親しんでくれなければ教化の事業は決して實の擧るものでは御座いませぬ。教育社會の一部に於て見る如く、先生はこちらのものはつまらぬといひ、生徒は先生はけしからぬといふ風あとがあつては最早たしまひであります。先生は精神上の醫者であります。患者の病勢がひどければ

ばひどい程一入（ヒトシホ）の同情が必要であります。自ら患者の身になつて、患者の痛みを己が身に感ずるやうな人でなければありませぬ。勿論沖繩人には多くの缺點がありまは。しかしその缺点は同情を値すべきものであつて、輕蔑さるべきものではありませぬ。若かしかから以上申上げた所で、理性は或は承知することがあるとしましても、感情は容易に承知しないものでありまは。一体吾々人間は吾々の最も自己と共通性を有すると夥多なりと感ぜる人に對する行爲と共通性鮮小なりと感ずる人に對する行爲と自ら差異あるものなることは吾々の知る處であります。これは實に社會學上の事實でありまして、人種と人種とを識別し、同人種の中に於ても一層狹小なる人種的簇聚若くは政治的簇聚を識別するもので御座います。これは所謂同類意識といふもので、吾々が平常經驗する所の主觀的事實でありまは。他府縣人と沖繩人との間に打解けない点のあるのも之

が爲であります。これは實に何でもない事でありますが、人間社會では
この何んでもないことが却つて容易ならぬものであります。さう云て此
問題は二者の間の言語風俗習慣等の接近によつて解決されるのであります。二者の間の言語風俗習慣の漸次接近云つゝあるとやがてこの問題を解決云つゝあるのでありますが、二者の間に血緣を通ずる者の增加しつゝあるのはこの問題の解決を一層速かならしむるものであります。この邊の所は敎育家諸君に十分研究して貰ひたい所であります

それから近來爲政者や敎育者が自らの功績を述立てることが流行しますが、これは彼敎育者の口で謳歌せらるべきものと存じます。よしや自分を滿足せ云むべき謳歌の聲を聞かずとも、自分が養成した所の人物はとりもなほさず活ける勳章であるといふ丈けで滿足して貰ひ度いのであります。成程僅々三十餘年に云て沖縄をこれまでに立派な沖縄にして戴いたのと有難い。沖縄人如何に健忘性なりとは雖、忘れることの出來ない所でありまも。併しながら吾々の方にもかうなるべき個性があつたといふ事を少しは言はせて貰ひ度いのであります。爲政者や敎育者が如何に偉くとも、沖縄人がアイヌや生蕃と同じ程度の人民であつたら、三十餘年にしてかういふ成績を見る事はとても出來ないだらうと存じます。三かつて米國人がアメリカ土人を劣等民族として輕蔑して取扱つた頃には彼等の中から何等の人物も出なかつたさうですが、米國人が敎育の方針を一變して、彼等を自分等の同胞としての人格を尊敬して敎育して以來、彼等の中から學者も政治家も詩人も輩を接して出たとのことであります。これは臺灣の敎育會に於て新渡戸博士がなされた演說の中にあつたので御座います。

終りに、鄕土の歷史は吾々に祖先より受けた所の遺傳と周圍より得た

所の經驗とを以て如何にして世に立つ可きかを敎え、又吾々を敎化する人々に吾々の社會進化の過程を知らしむるのであると申したいので御座います。以上申述べた事が双方の了解に資もる所がありましたら甚だ幸に存じます。（沖縄新聞所載）

今少柏改度儀御座得共國中に同心之者無御座悲歎之事に候知我者北方に一両公御座候事　（羽地按司）

譽れそしられや世の中の習ひ沙汰も無ぬ者の何役立ちゆが。（琉歌）

（具志頭親方）

野にすだ〳〵虫の聲々かまびすし誰がきゝわきでしな定めせむ。

（宜灣朝保）

沖縄人の最大缺點

沖縄人の最大缺點は人種が違ふといふことでも無い。言語が違ふといふ事でも無い。風俗が違ふといふ事でも無い。習慣が違ふといふことでも無い。沖縄人の最大缺點は恩を忘れ易いといふ事である。沖縄人は兎角恩を忘れ易い人民だといふ評を耳にする事があるが、これはどうしても辨解し切れない大事實だと思ふ。自分も時々斯ういふ傾向を有つてゐる事を自覺して慚愧に堪へない事がある。思ふにこれは數百年來の境遇が然らしめたのであらう。沖縄は於ては古來主權者の交迭が頻繁であつた爲に、生存せんがためには一日も早く舊主人の恩を忘れて新主人の德を頌するのが氣がきいてゐるといふ事になつたのである。加之久しく日支兩帝國の間に介在してゐたので、自然二股膏藥主義を取らなければならな

いやうになつたのである、「上り日ごと拜まゐる、下り日や拜まぬ」といふ沖縄の俚諺は能くこの遊の消息をもらしてゐる。實に沖縄人に取つては沖縄で何人が君臨致ても、支那で何人が君臨しても、かまはなかつたのである。清朝にかつて靖南王が叛した時の如き沖縄の使節は清帝と靖南王とに奉る二通りの上表文を持參して行つたことである。不斷でも支那に行く沖縄の使節は琉球國王の印を捺した白紙を用意してゐていざ鎌倉といふ時にどちらにも融通のきくやうにしたとの事である。この印を捺した白紙の事を空道といひ傳へて居る。之をきいて或人は君はどこからさういふ史料を探致てきたとか何か記錄にでも書いてあるのかと揚足を取るかも知れぬ。しかし記錄に載せるのも物にこそよれ、沖縄人如何に愚かりと雖、かういふ一國の運命にも關もるやうな政治上の秘密を記錄などに遺して置くやうな事はしまい。これは古來琉球政府の記錄や上表文などを書いてゐた久米村人間で秘密に話されてゐた事である。（附錄六十三四頁參照）兎に角昔の沖縄の立場としては斯ういふ事いありさうな事である。食を與ふる者は我が主也」といふ俚諺もかういふ所から來たのでゐらう。沖縄人は生存せんがためにはいや〳〵ながら娼妓主義を奉じなければならかつたのである。實にかういふ存在こそは悲慘なる存在といふべきものであらう。この御都合主義はいつしか沖縄人の第二の天性となつて深く深くその潛在意識に潛んでゐる。これはた沖縄人の缺點中の最大なるものでもあるまいか。世ふかういふ種類の人程恐しい者はない、彼等は自分等の利益のためには友も賣る師も賣る場合によつてい國も賣る、かういふ所ゐ志士の出ないのは無理もない。沖縄の近代史に赤穗義士的の記事の一頁だに見ゐない理由もこれで能くわかる。しかしこれは沖縄人のみの罪でもないといふ事を知らなければならぬ。とにか

く現代に於ては沖縄人にして第一この大缺點をうめあとす事が出來ないとしたら、沖縄人い市民としても人類としても極々つまらない者である。然らばこの大缺點を如何にして補つたらよからうか。これ沖縄教育家の研究すべき大問題である。去かしさしあたり必要なる事は人格の高い教育家に沖縄の青年を感化させる事である。陽に忠君愛國を説いて陰に私利を營むやうな教育家は却つて沖縄人のこの最大缺點を増長させるばかりである。自分は當局者がこの邊の事情を十二分ゑ研究せうれんとを切望もる。(四十二年二月十一日稿沖縄新聞所載)

林世功官生新垣辞世之詩二首

古來忠孝幾人全憂國思家已五年一死尚期存社稷高堂專賴弟兄賢。
廿年定省半違親自認乾坤一罪人老涙思兒雙白髮赤聞羅耗更塡神。

進化論より觀たる沖縄の廢藩置縣

沖縄在來の豚は小さいが、此頃舶來したバークシャーは大きい、しかし二者は至つて縁の近い方でりの祖先ともと南支那に居たといふことである。同一の祖先から出た豚でも甲乙と相隔つた所にもつて行けば、地味や氣候の關係でりれから生れる豚の間に多少の相違が出來、なほ五代十代と時の經つゑつれて變化するが、りれに人間の力が加はるとりの變化がもつと甚しくなる。さて範圍の廣い英國では多くゐる豚の中から理想的のものを選び出して之を繁殖の目的に用ゐ、りの生んだ子の中から更に理想的のものを選び出して繁殖させたので、豚が次第々々に改良さ

れて今日吾々が見るやうな大きなバークシャーとなつたが、範圍の狹い沖繩では飼養法が惡い上その繁殖方を唯老いぼれた種雄豚に一任して置いたので、何時まで經つても改良されないで今日に至つたのである。沖繩でその他の動物の比較的倭小な理由源因も亦こゝにあると思ふ。然らば沖繩人の體格はどんなものであらう。他府縣人に對して遜色があるかどうかは知らないが、人種學上沖繩人の身長の平均數は他府縣人のそれよりも少し低いといふことになつてゐる。島居龍藏氏の調査によれば日本の男子の身長の平均數は一迷五九で琉球の男子の身長の平均數は一迷五八であるといふことである。　その理由原因は決して一通りに限つた譯では無く、種々の事情があつてさうなつたのであらうが、久しく絕海の孤島に住居してゐて、餘り他の血液を混じなかつたことや、島内でも盛ん血族結婚が行はれたことや、その他制度の上から來た習慣等のために

さうなつたのであらう。（沖繩の中でも古來他人種が餘計に入り込んだ那覇や、雌雄淘汰が盛に行はれた首里の城下又は立派な體格の人が多い。）所が明治十二年の廢藩置縣は退化の途を辿つてゐた沖繩人を再び進化の途に向はしめた。になはちこの時以來内地人はどし〳〵沖繩に這入つて來る、沖繩人はうろ〳〵内地へ出て行く、士族は田舍へ下つて行く、田舍人ゝ都會に集つて來るといふ樣に沖繩がかきまぜられた。さうすると自然と雜婚が始まり、雌雄淘汰が行はれる、段々と理想的體格の子が生れるのは當然のことである。實に舊制度の破壞と共に永い間の壓迫が取去られたので、今まで縮んで居た沖繩人は延び始めたのである。三十年前に比べると沖繩人の身長の平均數は確かに增してゐるに相違ない。生物學者の實驗によれば　一個の單細胞が分裂して幾千かの細胞が增殖にると、次第に其形も小さくなり、其勢力も弱くなり、そしまは活潑に運

動してゐた所のものが漸々不活潑となり、なほ少の儘に打つ遣つて置けば周圍には充分の食物があるとしても終には多く分裂したものが全く死滅して了ふ。所が斯く微弱となつたものでも、もし其時他の細胞より分裂し來つたものに合はすことが出來れば、彼等双方のものは直ちに接合して双方に於ける組織成分を交換し、再び分れて舊に復し、その各が活潑に運動し、はじめの如くまた盛に分裂增殖の作用を營むことが出來るといふことである。さうして松本文三郎博士い之から推論して、原始細胞は一定の度迄は自發的に生殖の力を有することが出來るがそれより以上は必ず他種異性のものと合しなければ、生殖の作用を營むことが出來ぬ。そして若し他種のものと合すれば此に其生殖の能力を得て、能く子孫を造ることが出來、單細胞のものにあつては之によつて一定の時期の間、其作用を持續する、一定の時期を經過して、一定の子孫が生ずれば、再び其勢力は枯涸して、又他種のものと合する必要が起るのであるが、多細胞のものにあつては斷えず他種のものと合ひることを要もる、兎に角他種のものと合するといふことが勢力の微弱なる細胞よ取つて其勢力を恢復せしむる原因となるのであると言はれてゐる此に由て之を觀れば明治十二年の廢藩置縣は弱微となつてゐた沖繩人を改造するの好時期であつたのである思想上に於ても亦同じ現象が見られる。　數百年來朱子學に中毒してゐた沖繩人は急に多の思想に接した。　即ち活きた佛敎に接し、　陽明學よ接し、基督敎に接し、自然主義に接し、其他幾多の新思想に接した。これとた賀すべき現象ではあるまいか。かく多くの思想に接して今後の沖繩が今迄に見るとの出來ぬかつた個人を產出すべきとわかりきつたとである。今日となつて考へて見ると、舊琉球王國は確に營養不良であつた。して見ると半死の琉球王國が破壞されて、琉球民族が蘇生したのは

寧ろ喜ぶべきことである。我々は此點に於て廢藩置縣を歡迎し、明治政府を謳歌する。

兎に角廢藩置縣は琉球社會發達史上の一大時期である。自分と今この時期以前の沖繩の社會を生物學上の事實と比較して說明してみよう。海岸へ行つて、岩石棒杭等の表面を見ると、フヂツボと貝の樣なものが一面に附着してゐる。この動物は解剖上發生上からいへば、確かに蝦や蟹と同じく甲殼類に屬するが、蝦や蟹が活潑に運動して餌を探し廻る中に交つて此奴だけは岩おどに固着して一生涯動くともなく餌の口に這入るのを待つて居る。足もなければ眼もない、外から見ると一枚の貝殼を被つたやうであるから、蝦や蟹の如く足や眼があつて巧よ運動するものに比較して通例フヂツボを退化したものと見做すが、其境遇に於ける生存に適するといふ點では決して蝦や蟹に劣るものではない。海岸の岸石の

表面に無數に生活して居るのは、嬰〻其處の生活に適して居る證據である、此奴等は兎に角丈夫に固着してゐる故、潮が烈しく岩に打當てゝも離れる虞が無く、隨つて岩に打付けられる樣な恐れも無い。此奴足も無い眼もないものではあるが、蝦や蟹が如何に運動感覺の器官が發達してゐても、此場所では之と競爭は出來ぬ。(丘博士進化論講話中の例) これは實に過去の琉球を說明するに相應(フサハ)しい例である。明治十二年前の沖繩人は恰もこのフヂツボのやうなものであつた。(今なほさうであるかも知れぬ) 實に沖繩人と慶長十四年島津氏に征服されて以來、この政治的壓迫の強い處で安全に生存するために、その天禀の性質を失つて意氣地ない者と成り下つたのである、活氣の少い朱子學が盛に行はれて、諸子百家の書や活氣ある宗教が禁せられたのゝ專ら沖繩人の生存上の必要からであつた。此處ではグズ〳〵してはいけないといふことはやがて自滅を

すゝめることにかゝる。世界の中で如何に強い武士も此場では扇子一本を持つた沖繩人と競爭は出來ぬ。このアヂツボ的社會組織は斯ういふ境遇には最も適當なるものであつた。現今沖繩人が沖繩群島に五十萬といふ程盛に生活してゐるのは即ち其處の生活に適してゐた證據である。風波の荒い所では誰が何と言つても、無言で現位地にかぢりつくに限る。（沖繩群島の樣な風の强い所にと高く高く天にまで舞ひ昇る樣な雲雀は一羽も翱翔してゐない）假りに沖繩人に扇子の代りに日本刀を與へ、朱子學の代りに陽明學を敎えなどしたら、どうであつたらう。幾多の大鹽中齋が躍出して琉球政府の役人としはぐ〳〵腰を拔かしたに相違ない。りして廢藩置縣も風變りな結末を告げたに相違ない。世の中では通例優つた者が勝ち、劣つた者が敗れるといふが、優勝劣敗といつても我々が優者と見做す者が何時も必ず勝ち、劣者と見做す者が敗れるとも限らぬ。たゞ

りの場合に於て生存に適する者が生存する。それは兎に角廢藩置縣で、政治的壓迫は取去られたが、沖繩人は浪が打當てなくなつた岸上のアヂツボのやうに困つた。そして三十年も經つて足が生え眼が明いても、なほ不自由を感せざるを得ない。思ふにかういふ三百年間の壓迫に馴れた人民には意志の敎育が何よりも必要であらう。意志敎育なるかゝる。これ亦沖繩敎育家の研究を値ひべき大問題である。（四十二年十二月十二日沖繩新聞所載）

宜灣朝保

○

古の人にまさりてうれしきはこの大御代にあへるなりけり

那覇獄中作（竹蔭堂艸稿の中より）　龜川里之子

獄裏操南音悽悽白雪吟回邦家尙遠受苦恨遙深　未到家庭直到獄中

○　仝　上

努力田園裏幽棲一枕安何隨新敎化不改舊衣冠

土塊石片錄

上

自分はかつて記紀萬葉などにある七世紀以前の大和言葉が今なほ沖繩諸嶋に遺つてゐるといふことを例に引いて、九州の東南岸にゐたアマミキヨ種族が紀元前に奄美大島を經て沖繩嶋に來たといふことを言語學的に証明したことがある。又七世紀の頃南島人が始めて大和の朝廷に來貢した時分譯語を設けて相互の意志を通じたと云ふことが國史に見えて居から、分離後六七百年も經つた爲に大和言葉と沖繩言葉との間には餘程の差異が生じたのであらうと言つたこともある。その後沖繩諸島の方言やその古語を研究するに及んで其中に東鑑にあるやうな鎌倉以前の言葉の多く這入つてゐるのに氣が付き、もしや內地と沖繩との交通が鎌倉時代に至つて一

入頻繁になつてゐたのではなからうかと思つて首をひねつて見たが、これぞといふよい證據が見つからなかつた。或日おもろそうしを繙いてゐるとふと

、、、、、、
くすぬきはこので
やまとふねこので
やまとたびのぼて
やしろたびのぼて
かわらかいにのぼて
てもつかいにのぼて
、、、、、、

といふ文句に出會つた。（楠舟を造りて、大和船を造りて、大和の族に上

りて、山城の旅に上りて、瓦を買ひに上りて、品物を買ひに上りて、といふ程の意である）これで研究の端緒が開けたやうな氣がした。大和へ瓦を買ひに上るといふことがあつて見れば、古くは沖縄では瓦を買ひに遠く内地まで出かけたことがわかる、もーどこかでこの瓦の遺物が見つかつたら恐らくあの疑問は解けることと早合点をして、それから古城趾を跋渉して内地風の瓦を探して見たが無益であつた。昨年の夏東恩納君が歸省したので二人で琉球文の金石文を讀みに浦添城趾を訪づれたが、思ひがけずも灰色の瓦が其處此處によろがつてゐるのを見た。捨ひ上げて見ると一寸した模様がついてゐて、外に經文らしいのが書いてある。この時自分はあのオモロを思ひ出さずには居れなかつた、りこで東恩納君にりの事を打明けて品のよい瓦片を一つ二つ持つて歸つた。しかし其道の人でなければもとより瓦の鑑定のつく筈がない。たゞ東恩納君が上京した

ら、專門家に鑑定して貰ふより外に道がないと思つた。今年の夏東恩納君が大學を卒業して歸つた日、早速あの瓦の事を尋ねると、專門家の鑑定よよれば疑もなく鎌倉時代のものであるとのこと。自分は飛立つ樣に喜んだ。アヽ浦添城趾の瓦は口なくしてよく七百年前の歴史を語つた。自分の想像は愈々事實となつた。あのオモロの文句は生き出した。これで鎌倉時代に内地と沖縄との間に頻繁な交通のあつたことがわかつたと同時に琉球語に鎌倉時代の言葉の混じてゐる理由もわかつた。（りの理由は外にもあるが）嶋津氏に征服されて後、沖縄人が内地へいくことをハボル（上國）といつたのを當然のことのみ思つてゐたが、鎌倉時代以前にも矢張さういつてゐたことがわかつて慈かずには居れなかつた。鎌倉時代が終りを告げると、内地では南北朝の内亂が始まり、沖縄でも三山の分爭が起つたので、内地と沖縄との交通は二百年も斷絶して、この邊の消息は全く暗くな

つてゐたが、この土塊のお影で漸く明るくなつた。

下

笹森儀助氏の「南島探驗」を讀んでゐると八重山島や與那國島にある大和墓や八島墓ハ七百年前の平家の落武者の墓であるといふことがある。幣原博士の「南島沿革史論」にも同樣のことが見えてゐる。うして今では琉球を探驗する人で大和墓八島墓のことを筆にせないものハゐない位である。大和墓八島墓の名は成程平家の末路を聯想せしめる。昨年の三月自分も世の探驗家のまねをして八重山探驗と出かけた。或日二人の八重山青年に案内されて平川の有病地に所謂大和墓を詣でゝ平氏の靈を吊うたが歴史的懐古の念はやうやく考古學的好奇心に變じて自分はいつしか白骨や遺物をいぢり始めた。其間に一人の青年は此十四人の骨は以前には其處此處にちらばつてゐたのを西常央氏が一纒めにしてこの通り碑を建

てたといふとや、昔甲冑を着けた騎馬武者がこの邊に上陸したとや、其中の一人が土人が頭に物を載せて山から下つて來るのを食人人種と思つて驚いて自殺したとゐどを熱心に物語つてゐた。自分は一種の感に打たれながら所謂平氏の遺物を少しばかり取り出して見たが、長さ一尺二三寸縦横四寸位の杉の箱數個と枕數個の外には何物も見出さゐかつた。聊か失望ゑてこの骨を一纒めにしなかつた以前の有樣が見度かつたと言うと、例の青年ハこれから二三町程行くと洞穴がある、その中には西さんが氣が付かゐかつたのが二つうの儘遺つてゐると言つた。大急ぎで行つて見ると、成程此處のは半パ棺の中に這入つてゐて、おまけに前の所で見たやうな枕と箱までが一緒になつてゐる。これが七百年前のものとはどうしても受取れゐい、二人の青年にひよつとするとこれは二百年位前のものかも知れないよといふと、二人は厮に落ちぬといふ面持をしてゐ

た。此刹那に箱の蓋をあけると、案の通り石で造つた圓筒狀の煙管の雁首が一個出た。箱の蓋を能く見ると、煙草を刻んだ跡もある。自分は鬼の首でも取つたやうに大發見！と叫んで、二人の青年にこれで平家の落武者の墓で無いことが能くわかつたといふと、一人の青年は不平らしく、何故ですと問ひ返へした。自分はこの連中は煙草を吹つてゐたから、と答へたが、例の青年はまだ解せぬらしかつた。そこで自分は煙草が始めて歐州人に知られたのは今から四百年前（西歴千四百九十二年で）メキシコのユカタン州のタバコ地方で發見したので、その日本に輸入されたのは永祿年間であるから、これが七百年前の平氏の遺骨でないことは火を觀るよりも明かであるといつた。二人も成程とうなづいたが、いくらか失望の體であつた。自分は言

實物大

葉をづゞけた。今の證據物件では大和墓だけが平家の落武者の墓でかいといふことになるので、平家の落武者が八重山に來たといふことはまだ否定されない。平家落のとき當に八重山や與那國の口碑にあるのみならず、二百年前に出來た「遺老說傳」にもあるから、餘程古くからあつた口碑と思はれる。まだ信ずる餘地がある。特に八重山の人が古來自殺をする時に腹を切つて死ぬところなどはヨリ大なる證據である。これは八重山の人が能く父祖の習慣を遺傳してゐると思ふ。八重山の人が平家の子孫だとすれば彼等の系圖の上から沖繩本島の人よりも一入日本人種に近い親類否純粹なる大和民族といふ事にある、斯う語り了つた時、二人の青年は始めて安心したといふ有樣であつた。これは兎に角自分は折角平家の落武者を弔ひに行つて煙管の雁首を得　歸つた。

四十一年九月　琉球新報所載

おぼつかなうるまの島の人なれやわが言の葉を知らず顏なる　千載集

浦添考

一

沖縄の歴史をしらべた事のある人は、浦添（ウラソイ）といふ名稱が沖縄の上古史から離れた事の出來ない名稱である事に氣が付くであらう。むかし舜天や英祖や察度の樣な王者を出した浦添と果して如何なる所であつたらう。

浦添の事をしらべるに參考となるべき史料は至つて少い、しかしたとひ圖書となつて遺つて居ないでも、神の名とか地（トコロ）の名とかいふやうな固有名詞が傳はつてさへ居れば、その解釋（シラベ）によつて、研究の端緒は開けるのである。さて浦添といふ名稱にどんな意味があるかと去らべてみたら、浦添といふ漢字はアテ字であつて、もというらおそいとカナで書いたといふ事がわかつた。浦添のようどれの碑文に、

うらおろいよりしよりにてりあがりめしよわちやとうらおろいのようどれは、、、、、、、、

といふ文句がある。明の天啓年間に編纂したオモロ双紙にもうらおろいと書いてある。うらおろいは後に縮まつてうらろいとなり、遂に浦添の二字であらはされるやうになつた。うらたろいはうら（浦）おそふ（襲）といふ言葉の名詞形で、浦々を支配する所といふ意をもつてゐる。（これから推して熊襲も、くま即ち山地を襲ふ人民の意と解去たら面白いと思ふ）この言葉の活用してゐる例をオモロに求めると、

きこゑきみがおしうらのかずたろう、、、、

尊い王がどの浦も支配にるの意である。オモロには之に似た例が多い、

天（テニ）ぎやしたたろてーよりもりふさよわせ

天下を支配して首里に君臨せよの意である。又

きこゑきみがなし　ちまおそてちよわれ
ゑそとかよわぎやめおちおりいしよ　世しりよわれ

尊き王よ此國を治めよ船の通はむがきりわが王之を支配せよといふ意である。又だしまたりうあちたりい（この島を治むる君）だきよりおりうあちおりい（この國を領する君）といふやうなこともある。うらたりう、しまおりう、くにたそう、天ぎや下おおう、國しる、島しる、世しる、何れも國を治めるといふ意である、オモロには形容詞法になつて、くにおりいぎみといふやうに用ゐられた例もある。國を治むる人といふ意でくにおりい、くにもり、くにしり、のやうに名詞法になつた例も多い。按司添の添はおそいで治むる人といふ意味をもつてゐる。ヤラザモリ城の碑文に、しまおりい大さと、ちもし、ましり、といふ地名のあるのも注意すべきである。これらの例によつて司添の語原は明らかになつたが、

今一つ他の例を擧げて、一層之を確めよう。百九十三年前舊琉球王國政府で編纂した「混効驗集」（内裏言葉（コウトウ　ダイヤレクト）を集めたもの）に

もんだもい　百浦添御本殿

といふことがある。もんだすいは俗に所謂唐破風（カラハフ）で舊琉球王國の内閣である。もんだにいがもいうらたそいの轉訛ちたものであるとは、みたやだいりのたもろお双紙にある「昔神代に百浦添御普請御祝ひの時」の頌歌を見てもわかる。

しより（首里に）おわる（在す）てだこが（王が）もいうらおりい（百浦添御本殿を）げらへて（修築ちて）たまゞしり（玉の戸）たまやりと（玉の戸）みもん（美しいかな）くすく（城に）たわる（在す）てだこが（王が）もいうらたりいは三十一年毎に建てなをす例になつてゐたが（？）りの落成式の時にはいつもこのオモロを歌つたのである。又

玄よりおわるてだこみかなしのてだこ
もゝうらおそいちよわちへ
世ゐうゐりちよわちへ

といふオモロもある。吾等が敬慕する首里の王が內閣に出御ましまして
といふ程の意である。世ゐうゐうもりは世を製う所でもゝうらおゐいの對句
である。もゝうらおゐいは百浦即ち數知れぬ浦々を支配にる局の意で政
令の出づる所といふことになる、たもろには、くにつぼ（國局）ともいつ
てある。これで浦添の意味は一入明白になつたが、尙浦添が果してゐの
名稱の意味にふさはしい所であつたかどうかを吟味して愈々この解釋の
誤つて居ないことを証明してみよう。

二

浦添の名は文治三年爲朝の子尊敦が浦添から起つて琉球の王位に登つ

た時に著しくなつた。この尊敦（舜天と尊敦とは音の以た所がある）は十五歲にして浦添按司に推された位であつたから、當時浦添に於て餘程人望があつたものと思はれる。而して三代七十三年の間ゐの朝廷で勢力のあつたものは浦添の人であつた。中に就いて名高いのゝ、

ゑぞのいくさもい月のかぜあうびたちともゝとわかてだはやせいちへ
ちへいくさもい夏は御酒もる冬はしげちもる

と歌はれた英祖のナクサモイであつた。彼れはエゾの城主の嫡子で七年の間舜天の孫義本王の攝政をつとめて、遂にその讓を受けたといふやうに傳へられてゐる。彼れが居たといふ城は伊祖城といつて、今もなほ殘つてゐるが、浦添城を距ること十町許の山脈つゞきで、而も彼と此とがその兩端をなしてゐる。規模は狹隘ではあるが、要害の点に於ては浦添城に勝つてゐたのであらう。うらたゐいのたもろ双紙、にいふ所のエゾの

石城エゾの金城とはこの城のことである。

ゑゞゑゞのいーぐもくあまみきよがたくたるぐすく
ゑゞゑゞのかなぐすく

伊祖の石城はアマミキヨが築いた城で、伊祖の金城と、といふ意である

六百五十年前に於てさへ古い城と思はれてゐたのである。又

ゑぞゑぞのいしぐすくのぼてみちやるまさり
ゑゞゑゞのかなぐすく

伊祖の石城は登つて見たら、勝れてゐる、伊祖の金城は、といふ意である

兎に角要害であつたといふことがわかる。

ゑぞゑぞのいしぐすくいよやにたりてちよわれ
ゑぞゑぞのかなぐすく

伊祖の石城よいよ〳〵ます〳〵支配してよ伊祖の金城よ、と。いかに近

隣を威壓しつゝあつたかを想像せしめる。以上のオモロによつて判断してみると、英祖はおとなしく義本の讓を受けたのではなくして、武力を以て舜天の流、威壓したのでもなからうかと疑はれる。英祖の時（弘長元年）に何處からか禪鑑と云ふ僧が漂流して來て浦添に極樂寺を建てたのは注意すべきことゝ思ふ。　佛教はこの時始めて沖繩に入つたのである。袋中が「琉球神道記」によれば、所謂琉球固有の文字の發明された所も浦添である。又「琉球文よて記せる最後の金石文」の立つてゐるよゝどれも此處にある。英祖の統は五傳して西威に至つて衰えた、殆んど百年の間である。これに代つて琉球の中山に君臨したのも矢張浦添の人で時の浦添按司察度（ヂャナモイ）である。こゝで誰れでも氣がつくことは浦添の人が一たび首里おやぐに（首里の都）に入ると百年經たずで腐敗して、新しい浦添の人が之と代ることである。とにかく沖繩史の幕が開

けてから尙巴志が三山を統一するまで凡そ三百年の間首里たやぐにで繁昌したのは浦添の人であつた。實に「ちこうらたそいや　（名高き浦添と）あちの（接司の）すでたやぐに（產地）」であつた。思ふに浦添は首里の出來ない以前に於ては沖縄島の中心であつたらう。以上の歷史的事實で浦添に國を治むる所といふ意味のあることはわかりかけたが、次に浦添の歷史地理を調べて結論を急がう。

三

案ずるに沖縄の港は牧那渡、泊、那覇と云ふ順に開けたのであらう。察度王時代に牧湊が中山で重要な港であつたことは、「中山世鑑に」當時牧那渡に倭人商船數多參りけるが過半は皆鐵をぞ積みてける彼男子（察度）此鐵を皆買取てけり其比は牧那渡の橋は無くて上下往來の大道は金宮の麓よりぞ有りける

とあるのでもわかる。又同書によつて察度の第宅なる大謝名の金宮の邊が可なり繁昌した所であつた事もわかる。オモロ双紙によれば泊も那覇も古くは浦添間切の中であつたと云ふ事がわかる。浦添間切内の事を歌つたうらおりいのたもろさうし（明の天啓三年纂纂）よ、

あさとおきてたやみかまかまゑつむしよりたやぐに
ゐめくぐちたやどまり　なはどまりたやどまり

と云ふ事がある。ゐめくぐちは天久の港即ち泊港の事である。なはどまりは那覇港の事で、おやどまりは大きな港と云ふ事である。このオモロは安里の役人が禍島から首里政府に奉る貢物を受取る事を歌つたのである。當時泊は安里村の一部で浦添間切に屬する港であつて、那覇は浦添間切の西南端に位する小さな島であつた。英祖の時代に西北諸島すなはち久米、慶良間、伊平屋及び奄美

大島がはじめて入貢したので官廨を泊村に官舎をその北に建てた。この次にと泊港が沖縄第一の港であつたのである。寛度の時代に宮古八重山が附屬するやうにあつたので、所謂ちばなれ（屋島）の船舶の出入が頻繁となつた。三山統一後には一層頻繁となつた。

きこゑうらおろいにしひがのかまへもちよせて、
どよむうらたういに

と云ふオモロはこの邊の事を歌つたのである。名高き浦添に西東の貢物を寄せ集めて云々と云ふ程の意である。

きこゑうらおそいやーまのおややれば
もゝちやらのかまへつでみたやせ
どよむうらたそいや

前のと似て、名高き浦添は島々の頭なれば諸按司より献し來る貢物を取立てゝ奉れよとの意である。さて始めの程は泊港に關する一切の事務は安里掟（クシチ）に一任して置いたが最早間に合はなくなつたのである中山世譜に

荷德王成化二年王命吳弘肇（泊里主宗重）始任泊地頭職而寧管泊邑及大島德島鬼界與論永良部等島至干近世改稱泊町奉行後亦仍泊地頭兼任取次職（始建泊地頭）

いつしか泊地頭を置く必要を感じたのである。今をさること四百四十一年前のことである。

浦添考

四

沖縄と南洋諸島との交通が寛度以前に既に開けてゐたと云ふ証據はあるが、南洋諸島の船舶が何港に淀泊したかとことは判然しない。南洋諸島との貿易は十五六世紀に至つて漸く盛んになり、支那との往來も亦盛くなつたが、泊港はこれらの船舶を入るゝには餘りに狹く傍政治上

の都合等もあつて那覇を築港して貿易港にあてた、中山世譜に

本國自唐宋以來、與朝鮮日本暹羅爪哇等諸國、互相通好、往來貿易、但世遠籍湮、往來年月、難以委記、即今那覇親見世者、因與諸國交通貿易、故建公館于那覇、今置官吏以掌其事、名其館曰親見世、又建公倉那覇江中、以藏貨物、名其倉、曰御物城、然何建之、今難以詳考、

と書いてある。那覇が貿易港になつたといふことは那覇由來記を見てもわかる。又江戸立之時仰渡並應答之條々之寫といふ書にも「昔は沖繩島那覇港者唐融通の港にて候由」といふ記事がある。しかし中山世譜より前に出た、中山世鑑には少しもかういふ記事がないといふのでこの事實を疑ふ人があつたら、中山世鑑よりも二十三年も前に出來たオモロ双紙を一幣するが可い、さうすると、

よりおわるてだこがうきーまはげらへてたう、なばんよりようなは

どまりぐすくおわるてだこが

といふオモロを見出すであらう。これは右に出した漢文と殆ど同意義で首里に在す王が浮島を築港して唐南蠻の船舶の寄合う那覇港となした、といふ意である。今日の風月樓は昔の御物城（オモノグスク）の趾で、南洋貿易時代の遺物である。その附近から今でも青磁の破片が澤山發見される。これらの青磁には立派な唐草模樣が付いてゐて、　廣東省廣州府石灣で製造したとである。今日地勢上から見ても、那覇がかつて島であつたといふことも容易く想像される。その昔首里人が遙に那覇を見おろして浮島と呼んだのも無理でない。四百五十五年前までは首里から那覇へ行くには餘程の困難を感じたが、尙金福の時所謂長虹堤を築いて首里と那覇とを連絡した。遺老說傳に、

尙金福王命國公懷機築建長堤以便往來懷機以海底已深無力可施恭請祭
品祈天告神一七日潮海水乾涸則國內人民婦女運來石塊云々

とある記事や那覇由來記に、

偖沖道を築げる事は前代尙金福の御時國公といふ人有り人を利し世を
治むる故に斯名付其比封王有唐家の勅使此首里往復の路不平なり此人
俄に跋て一七日にし一石を布山を平ぐ云々

とある記事を見ても首里那覇の往來は昔は干潮の時でなければ出來なか
つたのがこの大工事によつていつでも渡ることが出來るやうになつたこい
ふことがわかる。この長提或は沖道といふのは潟原のツンマーシャーの前
から十貫瀬を經て崇元寺に至るまでの道路である。

かういふやうにして那覇は出來上つたのである。爾來泊港は本島及び
屬島の船舶をつなぐ國港となり、那覇港は外國船を入れる貿易港となつ
た。當時御物城の下に支那及び南洋の船の輻輳してゐたことはあのオモロ
を見てもわかる。察度の時に沖繩に歸化した三十六姓を那覇に置いたと
や武寧の時に始めて天使館を那覇に立てゝ冊封吏時中を迎へたことなどを
見ると、那覇の村落が五六百年前からあつたといふことは明かである。中

浦添

山世譜に

尙清王嘉靖七戊子年命毛見彩授那覇里主此職自氏始已無疑矣

この時に至つて那覇は全く出來上つて、泊港の繁昌を奪つたのである。

政治上に於ける浦添人は尙巴志の勃興によつてその勢力を失つたが、
牧湊泊那覇の三港を有する浦添は依然としてうらおろいであつた。記錄
の語る所によれば、宜野灣間切は寛文三年（二百二十二年前）に浦添北谷
中城の三間切を割いて置いたとのことである。而して嘉數大謝名伊佐宜野
灣等の村が浦添に屬してゐたとゝオモロによりて明白である。又西原間

切の棚原村も浦添の中であつたら。案ずるに昔は眞和志間切の大半も浦添間切に屬してゐたのであらう。又オモロによりて首里の北部が浦添間切に屬者てゐたとも明かである。首里ももと浦添から分離したのではなからうか。さてかくの如く可なり廣い面積を有し、主要なる港灣を備へ、而も多くの歴史的人物を産出した浦添の名稱が浦々を支配する所といふ意味を有してゐることは殆ど爭ふ可からざる事實である。（二十八年稿琉球新報所載）

島尻といへる名稱

地名の解釋からして琉球の上古史を瞥見したが、こゝにつけたりとして島尻といふ名稱の解釋を試みよう

島尻も亦浦添と同しくアテ字であつて、その文字の示す如く島の尻といふ意味ではない。しかしその文字の意味とその地理上の位置とが偶然に一致し、而も國頭中頭の名稱と釣合つて居る所から、今日では島の尻つぼといふ意味と解せらるゝに至つたのである。かういふものは一種の民間語源説（フォルクスエチモロギー）であつて、あてにならない説である。よしや島尻にさういふ意味があるにせよ、それがはじめから島尻全体の名であつたとは受取られない。島尻ともと一間切（マギリ）の名稱であつたものが遂に島尻全体の名稱として用ゐらるゝに至つたのであらう。かういふ例は頗る多い。ローマはもとアルバロンガ河畔にあつた小村落の名稱であつたが、ローマ人が勢力を得るやうになつてから伊太利半島の總稱となつた。シナもかつて南洋の商人が南支那の一部分につけた名稱であつたが後にも支那全体の名稱となつた。然らば今の島尻郡中で昔シマシリといふ間切があつたのではなからうか。

今より三百五十一年前（明の嘉靖二十二年）にヤラザモリ城（那覇港の左岸）にたてられた碑文に當時の島尻の間切を列擧して、

はねバら、ゑまれうい大さと、ちへねん、さしき、しもしまじり、きゝ

やめ

の六ヶ所としてゐる。これにまわしを加へると七間切になる。組踊（琉球の脚本）忠臣身替にも、

下の七間切我が自山どやゆる

といふことがあるし、京太郎の歌にも

下ん七間切、そうひん七間切、大鼓打つちやる、柵原ターグー、前原うちやがー、さうわうなもん、

といふことがあるから、昔は島尻は七間切に分れてゐたといふことがわかる。しかしこれらを總稱するにシマジリの名を以てしたかは疑問である

こゝに注意すべきはゑまれうい大さと及びしもゑまーりの名稱である。前者は巴志紀よ所謂島添大里で今日の大里間切附近のことである。俗に南山城所在の大里と區別して東大里といつてゐる。島添が浦添と同じく島を支配するの意を有してゐることは、

きこゑ君がなし島おそてちよわれ、

といふオモロを見てもわかる。（これは貴き君よ島をしろしめせの意）

或時代に有名なる支配者がゐた所といふことをほのめかしてゐる。しもしまじりは南山城所在の大里を中心とした所で今の高嶺、東風平、兼城、眞壁等を包含してゐたものと思はれる。しまじりも前のと同じく、島を知る即ち國を治める所といふ意味をもつてゐる。阿麻和利を謳歌したオモロの一節に

しまじりのみそでのあんに、くにーりのみりゐんじ

といふことがあるのでもわかる。しもしまじりの玄もはしもかた（下方）の意で中頭地方をうへかた（上方）といふに對して島尻地方をさした俗稱である。島尻地方のことを昔は下の七間切といつたが今かほ下の十五ケといつてゐる。しもしまじりは南方の主權者の居る所といふ意味のあることは、そこに大里按司承察度が南山王となつてから汪應祖を歴て佗魯毎に至るまで三世百餘年の間南山王國の首府があつたのでもわかる。十四五年前眞壁番所で南山王府といふ大きな額を見て慮ろに佗魯毎の末路を追想玄たことがあつたが、當時南山の首府なる大里の入口に中山門みたやうな大きな門があつて此額は其處に懸つてゐたのではなからうかと想像したこともあつた。又南山王の叔父が居たといふ糸滿は南山唯一の港であつて、その昔明の冊對使の船も此邊に錨泊したなどと老翁の話すのを聞いたこともあつた。唐船嶽の名は今なほ南山王國の盛時を偲ばしめる。承察度が建設した南山王國は恰もピレニース山中のサンマリノの如く極めて小さい王國であつた。かういふ小さい王國が明國に朝貢をしたり南京に留學生を出したりして氣張つてゐたことを考へると何となく一種の面白みを感ずる。さてしも玄まじりの名稱がかういふ所から出たといふことは殆んど爭ふ可からざる事實である。さう玄て南山王國の勢が盛になるにつれて南山城附近のしまじりなる名稱い漸々廣く用ゐられて、いつしかしもかた全体の總稱となつた。しかし月日の立つと共にもの本來の意味は全く忘れられて了ひ、島尻といふ文字をあてはめるまで及んで全く新意義を有するに至つた。

前にしまたりい大さとのことを少し述べて置いたが、これは南山の歴史をしらべるによい手がゝりになると思ふ。佗魯毎の時代にかつて南山王國が衰へると島添大里按司は近隣の諸按司を征服してしもべのよのぬし

（南山國の王の意）と稱した。この時の騷動の有樣は麻氏儀間親雲上家譜を見てもわかる。かういふやうに南山の半分を占領してしもしまじりを壓したのでうの城下の大里が遂に去まおそい（島を支配する）といふ形容詞を取るに至つたのである。もしその隣の佐敷から尚巴志（佐敷の小按司）といふ豪傑が興らなかつたら、彼は多分南山王になつてゐたであらう。沖繩が三山に分裂して相爭つた時代も終りに近いたと見えて、三山の中の南山も亦三つに分裂した。

沖繩の地名は大方かういふ樣にして解釋することが出來ると思ふ。沖繩のやうに記錄の少いところでは地名の解釋は一入必要である。

それから一寸附記したいことがある。島尻といふ名い宮古島にも久米島にも伊平島にもあるからこれで自分の說はいよ／＼固くなるわけである。

（三十八年）

阿麻和利考

かつれんかいきやるかつれんが
しまのうらまとよませ

（勝連のおもろ双紙）

きむたかはいやるきむたかが

凡そ歷史上の人物を研究するに當つては感情の尺度を棄てゝ理性の尺度を用ゐねばならぬ。楠木正成を忠臣として崇拜するなどは感情の尺度を以て度つた結果で、足利尊氏を偉人として評價するなどは理性の尺度を以て度つた結果である。前者には倫理的價値があり、後者には歷史的價値がある。余がこゝに沖繩第一の逆臣と呼はれる阿麻和利を研究せうとする所以は只だ彼れの眞相を紹介せうとするのであつて、之によつて沖繩第一の忠臣護佐丸公の倫理的價値を否定せうとするのではない。明

治三十一年の夏田島隨庵氏が「阿麻和利加那といへる名義」なる一篇を沖繩青年會々報に掲げて物議を釀して以來、また阿麻和利の事をかれこれ言ふ人はあないが、阿麻和利は果して毛夏二氏の由來記に依つて傳へられし程うれ程惡い奴であつたらうか。

古琉球

實に田島氏がいへる如く、阿麻和利が獨り逆臣の名を專にしたのは無論成敗の結果ではあるが、又琉球政府で王代記などの傳播を遮りしとと單ゑ阿麻和利の敵者たる二氏の由來記に依つてのミその事蹟の傳へられしと其他俗間に理外の勢力を有する組踊（クミオドリ）（脚本）に二重敵討のあるにも因るだらう。羽地按司向象賢が始めて琉球の正史「中山世鑑」を編纂した時にこの大事件たる勝連の亂を記さゐかつた所に深い意味のあるとを知らねばならぬ。阿麻和利 護佐丸の事は「中山世譜」に至つて始めて之を傳へ、「球陽」亦之を引用ゑた。かくて四百年の間に阿麻和利の善い方面は漸々忘れられ、其惡い方面のみ毋々言ひ擴げられて、今日吾々が見るやうな阿麻和利となつた故に阿麻和利の眞面目を知らうと思へばこの四百年間に附加した雜物を篩ひ落すと共にその埋もれた部分をも發堀しなければならぬ。

阿麻和利考

この堀出物は即ち明の天啓三年に編纂した勝連のおもろ双紙である。此は阿麻和利の光明なる半面を語る唯一の史料である。おもろ双紙は廿二冊歌數總べて千五百五十一首西暦千二百四十年頃から千六百四十年頃まで殆ど四百年間のオモロを收めたので、琉球の古語や歴史を研究するに缺ぐ可からざる資料である。天啓三年は阿麻和利の滅亡後七十三年今から三百七十餘年前で、勝連半島の民はこの時に至るまでなほ阿麻和利を追慕してゐたのである。余はオモロの光によりて琉球史上に於ける阿麻和利の位地を明かにせうとたもふ。

阿麻和利が琉球史上如何なる地位を占むるかを知らうとほるには三山時代前後の社會狀態を一瞥する必要がある。これまで琉球史を書いた人は何れも若玉城王の晩年（十四世紀の初葉）に國が分れて中山南山北山の三王國となつたと言つて、さながら一の王國が分裂したやうに思つてゐるが、余はこの分れると言ふことに就いては多少の疑を懷いてゐる。余

琉球

はこれらの三ヽ方が各自に發達して此時代にそれ〳〵國家の形態を取るに至つたと見るのが穩當であると思ふ。勿論この以前とても全島を統一せる主權者がゐる樣な觀は呈してゐたが、これは所謂アマミキヨ派の本家の系統をひける中部の主權者であつて、他日全島を統一すべき傾向を有してゐた者であらう。りして後日全島を統一したのもこの派の者であるから、いよ〳〵全島が古くから其有であつたらしく思はるゝに至つたのであらう。

國頭、中頭、島尻三郡の民が心質体質の上から多少區別されるのみならず、土俗學的にも亦區別されることを見たら、彼の三山鼎立の如きも亦偶然でないことがわかる。土俗學的に區別して見ると、元來島尻地方の住民は漁業で、中頭地方の住民は農業で、國頭地方の住民は獵で立つてゐた樣に見ゆる。さうして強固なる社會を組織するに適してゐる農業に從事してゐた中部の民が眞先に國家を形成してゐるのは然るべきことと思ふ。

阿麻和利考

初め彼等の中には幾多の小區分があつて、各部落皆强者を推して酋長としてゐたが、生存競爭の結果幾回かの分離合併を重ねて十四世紀の初葉に至り、遂に三個の固まりにまで凝結したものと思はれる。此は琉球史上の事實より見ても社會學の原理に照しても間違の無いことである。

三山が昔來て以來割據鼎立九十餘年の久しきに及び、中山王察度の慧智も未だ之を一統することが出來なかつたが、佐鋪（サシキ）の小按司（アジ）と呼ばるゝ

巴志は月城から起つて之を一統した。これ沖繩空前の鴻業を成したのである。沖繩は既に爭鬪の時代より政治の時代に入つたのである。今や古英雄漸く老いて政治家を要するの秋となつた、巴志は三十二歳にして兵を擧げ、五十七歳にして三山を一統し、六十七歳にして此世を去つた。

うの間内治の効績大に擧り、外交も漸く起つたが、之を引續ぐべき經世家がなかつた。(而して他日政治的に沖繩を統一すべき金丸は當年二十五歳で、妻子と共にうの郷里伊平屋島を逃れて國頭へ渡つたばかりであつた) 尙巴志死してより僅十五年の間に四回國王が代り、たまたまに王位繼承の小亂等があつて、

月城の守り世高さの眞物美影照り渡て國や丸む

と謳はれた尙巴志 世高眞物) の王國は漸く瓦解すべき前徵を現はした。この時に當つて北谷間切屋良村の一平民加那といふ者は起つて勝連の城

主茂知附按司 (姓によりて判斷して見ると聖川氏といふ日本人の子孫らしく思はれる) を殺して勝連半島を押領した。(今日の與那城間切は延寶四年今より二百二十九年前勝連間切を割いて設いたので阿麻和利時代には全半島を勝連と言つてゐた) 尙泰久王い加那を封じて勝連按司となした。これが所謂阿摩和利である。首里を離ること僅に六七里の所でかういふ事を演ぜしめて、而も之を制することが出來なかつたのをみて、中央政府の政令は汎く行はれてゐなかつたといふことがわかる。當時勝連半島で起つたやうな事件は他の地方にも起つてゐたと想像することが出來る。

阿摩和利は實にかういふ時勢に出たのである。うも〳〵彼は如何なる家に生れて、如何にして育つた者であるか、彼れの父母兄弟に就いても記錄も口碑も之を語つてゐない。只だ彼れの青年時代に就いて其敵者た

る夏氏の由來記が、

北谷間切屋良村に加那といふ者あり幼兒の時身弱く何の用にも立たず長じて後力量人に越え性質尤も奸佞にして只だ人々の田を耕し己が田を耕さず淫を好んで家業を修めず故に村人阿麻和利加那と呼ぶ云々

と記してゐるばかり。もとより阿麻和利に取つて都合の好い記事ではない。されど其中にも亦彼れの面影が見えないでもない。著者は阿麻和利加那をアマリ加那即ちソンバクモノの加那といふ義に書いてゐるが、村の人々は之を天降加那即ち神童加那のつもりでいつたのであらう。而して彼が誅された後アマンギヤナと訛つて、遂に世人の耳に惡る者と響くに至つたのであらう。この名義のことは後に細〻く述べよう。種々の記事や口碑を總合して考へて見ると、彼は夙に家を飛び出して浪人の生活を送つてゐたやうにも思はれる。又「只だ人の田を耕して己が田を耕さず」と

言ふ所などは能く彼が好人物であつたことを偲ばしむる。又蜘蛛の巣から思ひついて網を發明して漁民に與へて人望を得たといふ口碑もある。兎に角彼が己を忘れて人の爲にすることいふ心はやがて彼をして勝連半島の主人たらしめし所以のものであらう。夏氏由來記に、

近邊同列の少者從者數十人あり或日村人加那が家より來て問て曰く吾等汝に大恩あり此に因つて其恩を報せんと欲に願くは汝が望を聞かむとあるを見ても彼が如何に人に愛せられてゐたかといふことがわかる。實に彼れの知己朋友は彼れの爲には身命をも惜まなかつたのである。

恰もよし當時勝連の城主茂知附按司が酒色に耽つて政事を怠りたまけより百姓をいぢめたので不平の聲が全半島より漲つた。この頃「按司加那が餘才あるを知りて乃ち用ゐて頭取となす」といふこともあるから、阿麻和利は彼中の事狀にも通じてゐたものと見える。義俠家なる彼は百姓一

揆の頭となつて勝連城へ闖入し暴君を殺して人民を塗炭の苦から救つた人生感意氣功名誰復論といふ詩句は能くこの時の彼れの心事を形容もるとが出來る。彼が茂知附按司を殺した手段に就いて二つの説がある。即ち一は夏氏由來記の記事で一は俗間に傳はれる口碑である。この事を書くと長くなるから、こゝでは省くことにする。さてこの時の光景を夏氏由來記に左の如く記してある。

加那大ゐ喜び後宮ゐ入て見れバ美を盡し善を盡す是に於　從者ども座を設け美女を集めて酒宴をなす從者ども我先にと庫内に打入り金錢財寶を分取り喜ぶ事限りなし是に因て王之を許して勝連の按司に封じ給ふ云々

一揆の頭は一朝にして勝連の按司となつた。他日阿麻和利が更に大なる成功でもしてゐたら、彼を傳するものは如何なる筆を以てこの光景を寫

したのであらう。

阿麻和利は兎に角勝連の人民の意志によつて半島の主人になつたのである。然るゐ夏氏の由來傳に、

按司ある夜心の内に思ひけるは吾れ新に立て按司とかる若背くものやあらんとて獨り密に城を出て村中を周流するに一家に人多く集り酒を飲で樣々の事を物語りし古今の興廢を評論す按司竊に其の内を窺ふに一人聲をひりめし低語して曰く阿麻和利加那微賤の身を以て訛して按司となる是不測の僥倖に非ずやと云ひければ皆打諾き手を打て大に笑ふ按司之れを聞き甚だ怒り大音擧げ逆言して誰をか謗ると云ひければ一坐の人大に驚き地に拜伏して答ふべき言も無く色を失ひ汗を流して居ける處に其内一人の老翁言を飾て曰く君の威名世に重し路行く人も皆君の聖德を稱嘆す吾等も深く仰ぎ慕ふと誠に小兒の父母を望むが如

し故に屋良の阿麻和利今幸に吾が主上となり玉ふと恰も魚の水を得るが如しとぞいふ逆言して君を謗るに非ずと云ひければ按司其巧言に欺かれ大に喜んで城中に歸る是れより諸人聞傳へて阿麻和利と云ふといへるものゝ如き、夏氏を傳せしものゝ故更に彼を毀けんが爲に涅造せし話ではないかと疑はれる。

試みに勝連の人民の間に傳唱せられしオモロを引用して見よう、

かつれんのあまわり
こひやくさちよわれ
きもたかのあまわり
かつれとにせて
きもたかとにせて

勝連の阿麻和利、俊れたる阿麻和利、千年もこの勝連を治めよ、との意である。又

かつれんのあまわり
きこゑあまわりや
ちやくにのとよみ
きむたかのあまわり

勝連の阿麻和利、名高き阿摩和利は、この國の誇り、といふ意である。

阿麻和利考

かういふ類がまだある頗を煩はさなほ二三首を列記して見よう、

一、かつれのとよミてだ（勝連の名高き王）
もゝうらとよミてだ　百浦に名の聞わた王）
かつれのいちやくち
きむたかのかなやくち
上からはてるまはま

下からはばまかはに
一、かつれんのあまわり
たまミしやこありよな
きやかまくら　これといちとよま（都も鄙も之を稱へて謳はむ
しましり（島知り）のミそてのあんじ
くにしり（國知り）のみうあんじ
しよりおわるてたこす
たまみしやこありよわれ

實に勝連半島の民は小兒の慈母を慕ふが如く彼を慕ひ、路行く人も聖德を嘆稱去た。この時に當つて阿麻和利なる名義は殆ど救世主のやうな意味に用ひられた。大和言葉では天人降臨のことアモリといふが、琉球の古語でもアモリ又アムリと云ふ。「銘苅子」に此意の語を用ゐた所が三ヶ所

あまりしち我身や夢の間どやすが（天女の詞）
ほだし（産みの）母親や世界の人あらぬ
あまりしやる女あまくたりしやる女（銘苅子の詞）
あゝ銘苅子妻やあまり去やる女（上使の詞）

アマクダリといふ語は唯だ一個所句調を合さんが爲に用ゐられてゐる。

阿麻和利

大島でもアムリといふ言葉があるとのこと。アマワリ、アマオリ、アマリ、アムリは同語で天から降るの義である。要之アマリ加那は失敗去たために悪い意味に使はれたので、りの當時は天降り加那といふ意味をもつてゐたのである。

考

人或は成程勝連のオモロ双紙には「百浦とよみ王」などと阿麻和利が如何にも偉っかつたやうに書いてあるが、これだけでは安心が出來ない、何か勝連以外の地方で阿麻和利が偉らかつたことを謳つたのいないかと問

ひ返ぼでめらう。其時余は伊平屋島のテルク口を以て答へるであらう、大城げらいな、天城仕立てな、かゝれんのあまりが、勝連のあまじやらが、大和から下たる、やしろから下たる、石槌はこのおい、金槌はこのない、石槌と寄て來、金槌は寄て來、石なごは割り取て、赤なごは割り取て、石なごは振り取て、赤なごはふり取て、いぢち思子產らぢ、いぢち思子產しやい、乘馬は仕立てやい、立馬は仕立やい、乘馬は寄て來、立馬は寄せて來、かぬち鞍仕立やい、桑木鞍仕立やい、糸手繩打掛けて、芭蕉手繩打掛けて、しんざこんざ打ちおそて、引き腹帶引去みて、ざらいとに引きしめて、ざらいとに打乘て、島廻り廻やい、國廻り廻やい、お眞人寄て來、つわ者寄て來、深山口乘り込まい、深山底乘り込まい、大木本さとやい、高木本さとやい、大木もとねがやい、高木そらはんち來、藁みつみくんちやい、お眞人寄て來、

うつたてゆ寄て來、深山口引きたゐち、大兼久持ちおゐち、しらび庭の眞中、ーらびにやの側まで、目金細工寄て來、手ごま細工寄て來、四りバ斧寄て來、八そバ手斧寄て來、白繩打ちはんけて、黑繩打ちはんち、よりば取りとやげれ、やりば取りとやげれ、花木植付けて、眞九年母も植付けて、今ごもわつちやる、今ど花咲ちやる、今ど實つちやべる、今ど熟とほれたる、御主人の乙女が、はたちんのミやらべが、隱れもりもやげやい、盜ミもりもやげやい、御懷もり込で、ミ袖まで、もり込で、赤紙にうけやい、白紙にうけやい、我首里加那志御目かけて、思子までの目かけて、伊比屋祝にねしやげて、きちや祝にねしやげら。

この意味は「大城（或は天城）築いた時にも勝連の阿麻和利が、日本で出來た金槌を買ひ集め、それを使つて岩石を割り取つたり、馬に乘つて所

々方々を經巡つて人夫を進め、山から林木を切り取つたりして、大工事をやつた。そして種々の草花や九年母を植えた所が花が咲き實が結び、立派に熟するやうになつた。それを御主人の姫君がこつそり取つて懷に入れて家へ歸り、紙に包んで我が首里の王と王子等に御目にかけたり、伊比屋祝ときちや祝に上げやうとする云々」といふことである。これは阿麻和利が放浪してゐた時、伊比屋島まで渡つていつて人のために働いてゐることを語つてゐると思ふ。阿麻和利が敏腕家で而も活動主義の人であつたことはそれで能くわかる。

かういふ風であつた故、阿麻和利が勝連の按司となつてから、政蹟が大にあがり半島の民と樂つてキモタカの阿麻和利を謳歌し遠近の人々皆りの風を慕ふたのである。今日でこり勝連半島は寂しい村落になつてゐるものゝ、りの昔は隨分繁昌した所である。當時の民謳うていいく、

かつれんとてだむかてぢやうあけて
またまこがねよりやうたまのミうち
きむたかの月むかて

かつれんはけさむミやむなんじわらぶ

勝連（城）は日に向うて門を建てゝ、千珍萬寶寄合う玉の御殿ゥ、（キムタカの阿麻和利月に向うて門を建てゝ）勝連は古往今來按司を擇び、良主を得。この意である。この堅城を控へ、この名主を戴き玄半島の民は如何バかり滿足してゐたらう。尚眞王以前にあつては階級制度が發達してゐなかつた故、所謂百姓より出でて一城の主となるも敢て珍しくい無いが、尙泰久王をして遠くりの妹モゝトフミアガリを遣りて親を成さしめたる阿麻和利はとにかく琉球の豪傑たるを失はない例の由來記に

去る程に尙泰久王阿麻和利の才能人に過ぎたる由聞し召し即ち婚姻を

約して一家のよしみを結び王ふかくて後日翁主踏揚按司勝連按司に嫁ぐ時に王舅、王に言て曰く阿麻和利の生資才能人に勝れて尤吉也然れども我疑ひ思ふには彼れ王の婿に爲さば其勢を狹み驕心起て患をなさん事も計り難し且彼地都遠遠の所なれば變事有れ其知り難し因て吾心未だ悅ひず誰ぞ撿見の爲め武力一人綿かに附け遣すべ玄との玉ふ王舅の御心を安め奉らん爲めに王則ち鬼大城に命じて其臣士となし翁主に附隨して勝連に赴かしむ

と言ふことがある。王母の心配は或はあつたであらう。されど王は甚しく阿麻和利を信用してゐたのである。も玄王がいや〳〵ながらモヽトフミアガリ（踏揚按司）を勝連に嫁がしめたとせば、これ王昭君を胡國に嫁せしむるの類で、愈々阿麻和利の勢力の侮るべからざる者があつたといふ証據にゐる。おもろさうしに

もゝごふみあがりやけさよりやまさり
もゝちやちのぬしてだなりわちへ
きみのふミあがりや
しよりもりぐすく
またまもりぐすく

（モヽトフミアガリよ先よりは勝り百按司の主君となられてよ、君のフミアガリよ。）といふオモロがある。大方モヽトフミアガリの輿入りの時分に良配偶を得たのを祝福したのであらう。阿麻和利の得意思ふべし。

屋良村の百姓の子は遂に王の妹を妻とすることが出來た。例の由來記は記して曰く

是より阿麻和利身儀實の首に居て彌逆威を振ふて常に諸按司を見ること草芥の如く驕り傲ること甚暴よして既に君位を奪ふの志あり

られ或は然らむ。尙巴志沒して十有餘年、首里王府中またこの小王國を經營せるの政治家なく、三山の遺民は再び亂を思ふの有樣であつた。（未來の尙圓王金丸は漸く四十歳近くになつて居たがまだ無名の小官吏であつた）かつて茂知附（モチツキ）氏の壓制より半島の民を救つた阿麻和利はまたアルモノを考へ始めたのである。このアルモノを考へるといふことは「天下者天下之天下也非一人之、下」と斷言せし中山世鑑を有する琉球ではさほど罪ある考へでもなかつた。思ふに當時の諸按司は常に勝連按司の鼻息を伺つてゐたのであらう。而して百浦添（モンダソイ）に會議の開かるゝ毎に阿麻和利は議長のやうな觀を呈したのであらう。彼も實にオモロに所謂「按司（アジ）の又の按司」であつた。

琉球古

讀者もし勝連のおもろ双紙を繙かば思半ばに過くることがあらう。

かつれんゝかおにぎやたとへる

やまとのかまくらゐたとへる

きもたかはなれにきや

勝連は何にかマア譬へむ、日本の鎌倉に譬へむ、アハレ俊れたる阿麻和利は誰ゐかマア譬へむ。といふ程の意である。前ゐ阿麻和利を謳歌したオモロに、きやかまくら（京鎌倉）これどいちへ（これを稱へて）とよまが（謳はむ）といふことが出てゐたが、このきやかまくらは恐らくは都も田舍もといふ意に用ゐられたのであらう。當時昔の京都と鎌倉との關係か沖繩の都鄙に知れわたつてゐたものと思はれる。阿麻和利も實に勝連を鎌倉幕府の如き位地に進めようとしたのであらう。否さういふ計畫を實行しつゝあつたのである。諸君もし首里を以て京都に、勝連半島を以て三浦半島に比較したならば、その位置及びその歴史の酷似せるに驚くであらう。阿麻和利は將に小なる賴朝にならうとしてゐたのである。

阿麻和利考

ところがこゝに彼れの爲に少し都合の惡いことがある。此は護佐丸毛國鼎が中城の嶮に據つて絶へず彼れの行動を監視してゐることである。毛氏元祖由來傳によれば

古琉球

護佐丸公一人御娘御座候處容顏美麗の上尤賢德に被罷在尙泰久王被聞召されて王妃と云王ふ茲に因て護佐丸公の城は王都遠遠音信疎く殊に勝連按司阿麻和利權威を振ひ候に付彼を防禦の爲め中城の城方を被賜城廓造營遷居被仰付中城按司江爲被封由仕護佐丸公御事尙巴志より尙泰久王まで五君に被奉仕忠義廉直にして國中鎭守の職に被任一朝の大臣ゑて爲有御座由候

と書いてある。阿麻和利と等云く王家と姻戚の關係がある。又同由來傳によれば毛氏は巴志が佐敷以來の家臣ではなく、先の中山の名族で代々北山防禦の大任を帶びてゐたのであるが、護佐丸の時始めて巴志に仕へた者である、彼れははじめ北山防禦のため恩納の山田に城を築いて守つてゐたが、軍事上都合が惡いといふので、退いて座喜味に城をかまへた北山が亡んだので中城に移つた。彼れが座喜味城を築いた時の如き、大島鬼界ヶ島邊からも人夫が來た位であつたが、勝連との權衡を保つ爲に中城に移つて一入堅固なる城を築いた

阿麻和利考

その頃日本にかういふ城があつたかどうかゝ知らないが、沖繩に於てもこの中城式の城壘は護佐丸以前（即ち四百數十年前）にはなかつたのである。これは護佐丸が獨創的に設計したのであるかはた他から學んで設計したのであるかとにかく研究する必要がある。　世に忠臣としての護佐丸を知る人は多いが、築城家と云ふの護佐丸を知る人は少い、彼れは當時立派な築城家であつた。（しかし彼の敵手なる阿麻和利も亦この道に暗くはなかつたらしい。）　今から五十二年前米國の水師提督ペルリは沖

繩に滯在中、一日中城に游んで南島の古英雄を吊うたことがある。

護佐丸いこの天嶮に據り、士馬を訓練し、緩急よ備へてゐた。彼は阿麻和利に取つては眼の上の瘤であつたらう。しかし阿麻和利は斷えず之を除くことに苦心をしてゐた。或日彼は小舟（サバニ）に乘つて興那原の濱に上陸し、直ちに首里に參内をして護佐丸が謀叛の企をかほ出を讒言し。王命を奉じて中城の城を討つた。護佐丸は寃を訴へようとしたが、達するに由なく君命を重んじて敢て一矢を放たず、妻子と共にはかなき最後を遂げた。

古琉球

さて沖繩では古來護佐丸が儒教的訓戒を守つて快く死んだ所はやがて倫理的價値の存する所だといつてゐる。田島隨庵氏はこの時の騷動を單に二氏の權力爭ひに過ぎないと言はれたことがある。

兎に角阿麻和利が當時首里王府の信任の最重かつたといふ護佐丸を讒言して立ろに効を奏した所を見ると、首里王府に於ける彼れの信用も亦輕くはなかつたと考へなければならぬ。さうでなくとも彼が戰國策士的の辨舌を備へてゐたといふことは認めなければならぬ。彼はとう〳〵陸害物を除いた。彼れには最早世に憚る可き者がない。さりとて遽に事を發しようといふ考があつたかどうかは判斷しかねる。彼は實際意外な所から兵を擧げるべく餘儀なくされたのである。このことに關しては二三の疑点がある。第一、毛氏夏氏の由來傳の語る如く、鬼大城（夏居數）が阿麻和利の叛を知り、夜に乘じてモヽトフミアガリを誘うて、首里へ逃げた爲めに、己を得ず兵を擧げたのか。第二、モヽトフミアガリと鬼大城との間に妙な關係でも出來て、（口碑に鬼大城は淫亂の人であつたといふことがある）それが發覺して、或は發覺しさうになつて、二人が逃げ出したのが動機となつて、前後をわきまへずに兵を擧げたのか。第三、第一の事狀と第二の事狀とが一緒になつて、兵を擧げるべく餘儀なくされた

阿麻和利

か。三つの中何れか一つでなければならぬ。

兎に角阿麻和利は準備の未だ整はざるに首里城を圍み、遂に鬼大城の逆擊にあひ、勝連城邊海浪激し松風荒むところ寂しく逆臣の醜名を無

古琉球

則に傳ふるに至つた。鬼大城は勝連に盛なる血祭りをして目出度凱旋した。「王大に大城の勞を稱して特に紫冠の位を授け、且つ阿麻和利の器物並に勝連城の門城を悉く大城に賜ふ」た。うして阿麻和利の妻であつたモ、トフミアガリをも賜うた。これで四百五十年前の沖縄人の道德的生活の如何なるものであつたかゞわかる。

モ、トスミアガリが其夫を殺した鬼大城に身を許したのい、ソグヲルの作にあるイソルデが其將來の夫を殺した仇であるトリスタンとはかなき契りを結んだのに似てゐる。鬼大城には既に正妻もあつたのに彼女はかまはず嫁したのである。ア、可憐なるモ、トフミアガリ。思ふに二人

の關係は勝連城にゐた頃についてゐたのであらう。そうしてこれが直接或は間接に阿麻和利滅亡の一源因となつたと斷言しても强ち臆斷ではなからう。鬼大城とモ、トフミアガリとの間に出來た子の後裔かる首里の庠文仁殿内にも二人が勝連城を逃げ出す繪があるさうである。モ、トフミアガリと詩人の好題目である。

阿麻和利考

つら〳〵阿麻和利の人物を見るに何となく古英雄の面影がある。もし彼れをして三山時代にあらしめたならば、彼い尙巴志や焚安知と鹿を中原に爭ふたであらう。さりながら三山既に一統せられて世はまた古英雄を要しない時代となつた。阿麻和利はまかり間違つて亂世から治世になりかゝつてゐる時代に生れた。これはた阿麻和利を失敗させた條件の一である。この時首里城に在つて高所で阿麻和利の活劇を見物して微笑を漏した四十三歳位の官吏があつた。この人こうは天が亂後の沖縄を整理すべく遣

つた唯一の經世家である。阿麻和利の活劇は畢竟もるに此伊平屋王（尙家の元祖）のドラマの序幕たるに過ぎない。余は他日筆を改めてこの小家康を紹介せうと思ふ。「阿麻和利考」はやがてその緒論である。余はこ

古　こに「阿麻和利は沖縄最後の古英雄なり」との一言でこの篇を結ばう。

（三十八年六月廿二日稿、琉球新報所載）

琉　　かつれんの按司やだんじよとよまれるたけほどもはがれた人に巽て（琉歌）

球　　もゝとふみあかりや、天地よためかちへ、あまならち、さゑぶたす

けわちへ、

きみのふみあかりや

けおのりかるひに

けおのきやかるひに

（もゝとふみあかりにもろにさうしより）

琉球に於ける倭寇の史料

明末に南支那を侵した倭寇の餘波が琉球諸島に及んだといふことは、これまで人の知らかかつたことである。此は琉球に於てさへも忘れられてゐて、たゞ記錄によつてのみ傳へられてゐる。しかしうの時代の紀念物は、今なほ那覇港の左岸に遺つてゐて、三百五十年前の恐ろしい日のことを語つてゐる。琉球に往つたのある人は、那覇江の港口に南北砲臺の跡が有つて、珊瑚礁の上に並峙して、江口から海中に跨入してゐるのを見るであらう。北砲臺は所謂三重城で十四五年前までは其隍中に三個の橋門があつて潮を通じ　ゐた。南砲臺は所謂于攬新森城で、隍の中程のエビノマへといふ所より、二尺五寸立方の臺の上に高五尺巾一尺

八寸厚四寸の砂石で造つた石碑がたつてゐる。これすなはち琉球に倭寇のあつたことを語る唯一のヒストリヤンである。うの石碑は今は殆ど剝蝕して僅に「嘉靖〇十〇年みつのと」「きこゑ大きみ」等の十餘字を留めるばかりであるが、その琉球語で書いた金石文であることは明である。

この邊の老人に聞くと、三四十年前までいりの文字の過半以上は殘つてゐたとのことである。西暦千八百二年、琉球へ往つた清人李鼎元が「使琉球記」を見ると、「隙間有碑二一正書剝蝕甚微辨奉書造三字一其國草書前明嘉靖三十三年建雖不能盡識其筆力正自遒勁飛舞因令從者解」と書いてあるが、うの内容を記してゐない。又西暦千七百十九年、琉球に使した清人徐葆光が「中山傳信」錄にもたゞ「南砲臺隙中有番字石碑一額題曰丁攪城森碑嘉靖三十三年國王尙清立餘皆番字石頗剝蝕」とあつて、その内容が記してないのを見ると、この石碑には他の琉球の石碑のやうに裏の

の方に漢譯がついてゐなかつたといふことがわかる。（中略）

十六世紀の中葉（大永二年頃より天文二十二年頃まで凡そ三十二年間）に當つて琉球に於て土木工事が頻りに起り、隨つて琉球語の金石文を刻むことが盛に行はれた。（「琉球文にて記せる最後の金石文」參照）この頃日本の邊民が頻りに支那の江浙を侵し、早晩琉球にもやつて來るだらうとの警報が傳へられたので、時の王テニッギリツニセ（尙清）い國防の忽にすべからざるを感じて、明の嘉靖二十五年八月より同年十二月までかゝつて首里城の東南壁を改築した。この時のことを書いた碑文は添繼御門の前に立つてゐて、表には例の琉球文が刻まれ、裏にはその漢譯が刻まれてゐる。五年を經て、嘉靖三十年の三月に那覇港の左岸の丁攪（ヤラ）新森に砲臺を築く設計をなし、この年の十月二日より工事を起して同三十二年の四月二十八日に落成を告げた。うこでオモロを作つて天地神祇を

祭り國家安康を祈つた。そのオモロに曰く、

天つぎの、おさうせ、大きミは、たかべて、やらざもり、いしらごは
おりあげて、ともゝすへ、せいくさ、よせる、まじ、
わうにせの、おこのミ、せたかこは、のだてゝ、やへざもり、ましら
ごは、つみあげて、ともゝすへ、
きこゑ、天つぎの、世の、さうせ、めしよわちへ、たくの、みよう、
いしらごは、たりあげて、ともゝすへ、
とよむ、わうにせの、世の、さうせ、めしよわちへ、おくの、うみの
ましらでは、つみあげて、ともゝすへ、
きこゑ、大きミぎや、やらざもり、ちよわちへ、だしきや、くぎ、さ
しよわちへ、ともゝすへ、
とよむ、せだかてが、やへざもり、ちよわちへ、あさか、がね、とゞ

めば、ともゝすへ、

明る年の六月に、琉球文で書いた石碑をニビノマへに立てゝ、了攬新森城を築いた理由と其落成式の盛況とを叙し、終りにいざ鎌倉といふ時には、三人の國務卿は直ちに國民軍を召集して、外敵を防げといふ意の詔を記した。今殘つてゐる十餘字を見ると、正しく尊圓親王の書風であるから、この碑文は當時尊圓の書法に達して、世に尊圓城間と稱せられた城間といふ人が書いたものらしい。李鼎元がほめたようにその筆力は逸勁飛舞と評すべきである。さうしてこの頃に出來た石碑の書体は何れもさうである。ついでに言つて置くが、自分はかつて首里の書家田名眞宣氏の所藏にかゝる尚圓王の頃(四百年前)から現今に至るまでの首里王府の辞令を見たことがあるが、何れも平假名を用ゐた琉球文なるを見て面白く感じた。そして之を見て、一府匠、白く感じたのは、沖縄の書風が島津氏

の琉球征伐を境界線とし、二つに分れるようである。前のは何れも活氣がある、が、後のは何れも活氣がない。これで政治といふものは人間の指の先にまで影響を及ぼすものである、ことを知つた。

今「琉球國中碑文記」に載つてある「擅新森城の碑文の原文を「中山世鑑」や「那覇山來記」にあるものによつて校合して左に掲げよう、

「擅新森城碑文

りうきう國ちうさん王尙清てにつきわうにせのあんしたりいかなしのみ御ミ事、くにのようしとまりのかくこのために、やらさもりのほかにくすくつませてゝおかて、くに〳〵のあんしへみはんのさとぬしへけらへあくかへかミしもちはなれそろてからぬちへ、くすくつミつ弓てみおやゑちやれは、嘉靖三十三年みつのとのうし五月四日つちのとのとりのへにきこゑ大きみきみ〳〵のれれめしよわちへ、まうはらいめしよわちやるミせゝるに、やらさもりやへさもりいゝらこはましらこはおりあけわちへつみあけわちへミしまよねんおくのよねん世ちうもり國のまてやけらへわちへこのみわちへたしきやくきついさしよわちへなさかかねとゝめわちへまうはらてみよはらてて、いのりめしよわちやるけに、ともゝすゑせいくさよせらやいてゝとわうかなしむみはいたかみめしよわる、かみものあんしけすりろて千萬のミはいおかてなり、又ちやうらうはうにたりろてちかたゑのたよはいしめさしよわる、たきおはの天きや下はきこゑ大きミの御せちのミまぶりめしよわるけに、むかしからいくさかちよくのきちやることはなきやものやれとも、御世の御さうせ國のようしのために、いきやてゝいよことのあら時や、みはんの御まへ、一はんのせいや去より御くすくの御まふり一はんのせいやなはのはん、一はんのせい又はゑはらしまおろ